圖解

量地指南後編、

五

洋学文庫
文庫8
C 299
8

量地指南後篇巻之五

勢南 處士 村井昌弘編述

渾發術

渾發切要

量地術ハ器械を用て廣狹遠近高低深淺を量ること。初中終の三段あり。學習することを。亦是に隨ふ。其初ハ見盤を用て。一切の形を盤面に摸し。其中ハ元器を用て。大小の事業を十字に顕し。其終ハ渾発を携て無量の妙術を一本に盡す。蓋見盤の業ハ此地の種を以て彼所の形状知る。諸の地勢を摸し取術なり。元器の業ハ當支の順逆を野帳道作に記し。分度の矩を以て方角を糺し。圖画に顕す術なり。扨渾発の業ハ。見盤元器の両術を。此一本に畧

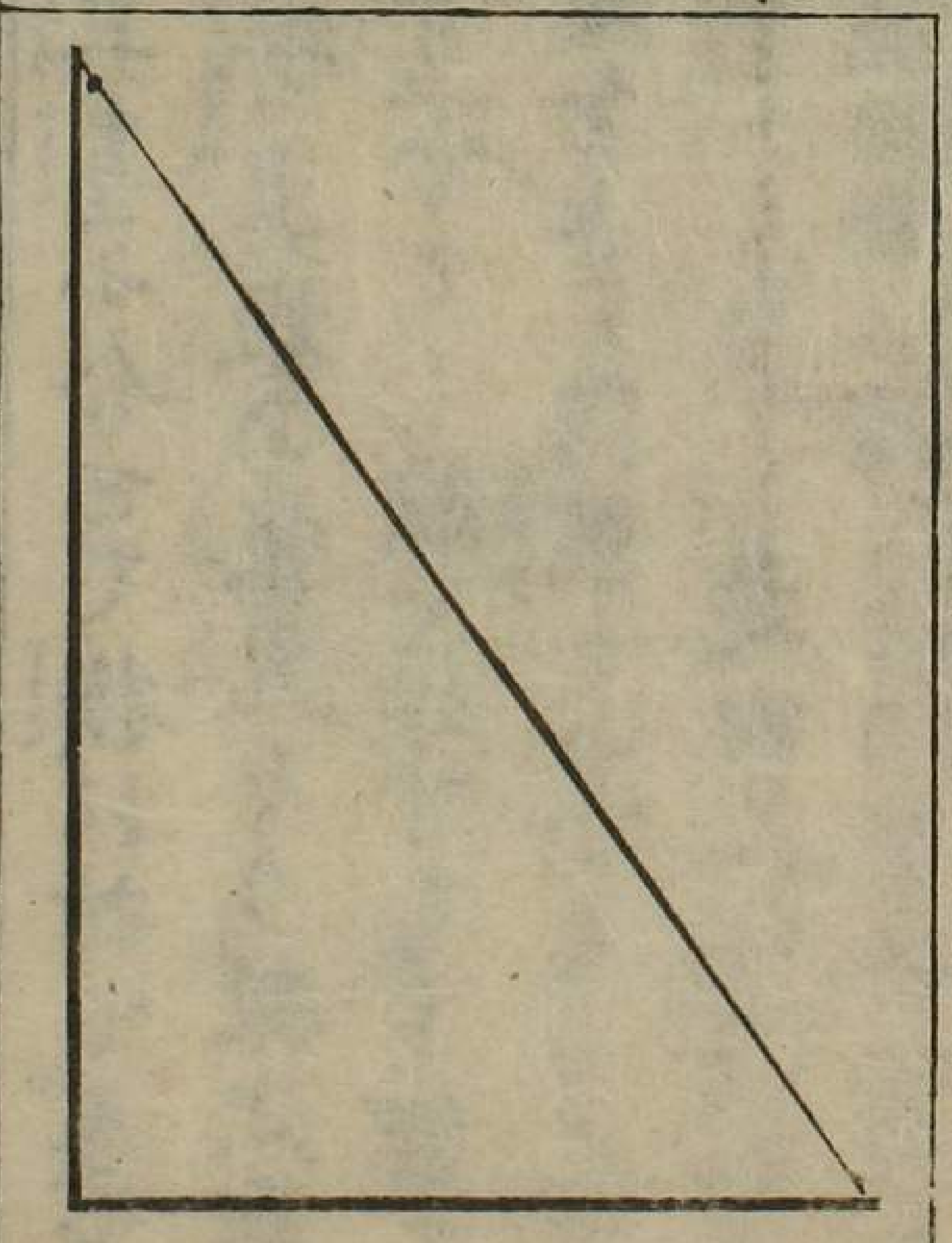
41- 7703

まで遠近廣狭高下淺深洩す所なく。詳に摸す妙術にして故に俗に本術ともいふ。其此渾発を用ゆる修練の切要は八箇なり。一曰堅体之法。二曰射形の習。三曰矩尺之定法。四曰物見之次第。五曰摸手之定寸。六曰右手矩尺。七曰左手揮発。八曰縦横之習以上是なり。最其切要と審にすべし。抑又渾発の妙用たるや。鈎股弦三四五の形に法とり。萬象と立所に摸し出すれば神器なり。此器元來量地術一用の為に制するに非ずといへども。諳に量地の法に叶ふこと微妙ならずや夫三四五の矩は陰陽合和の数にして。量地術の根本なり。方円曲直より。千形萬品此理に洩ることなし。因て其自在妙用の一二を左に記して學者を暁す。見るべし

筭理渾發

三四五矩

傳云筭理渾発といふ三四五の矩は本法なく。此は器物にあらずん眞矩の発見規矩（古傳に量地術を規矩術ともいふ）根元也。易傳序云数也易也。其理一といふ。即此理の筭法なれば。此矩を鈎股弦といふ凡規矩の術なれば。三四五といふ。縦にして直き物は垂縄なり。是を三といひ。鈎といふ。又横にして直き物は。水平なり。是を四といひ股といふ。其縦横合して斜直なる物を五といひ。弦と云いふ。是を總て眞矩といふ。蓋是は其理といふ。實に眞矩尺を寫す器は。即曲尺是なり。然といへども。其制麁にして眞矩に叶曲尺あること希なり。故に量地術に於て其矩を求め極むる



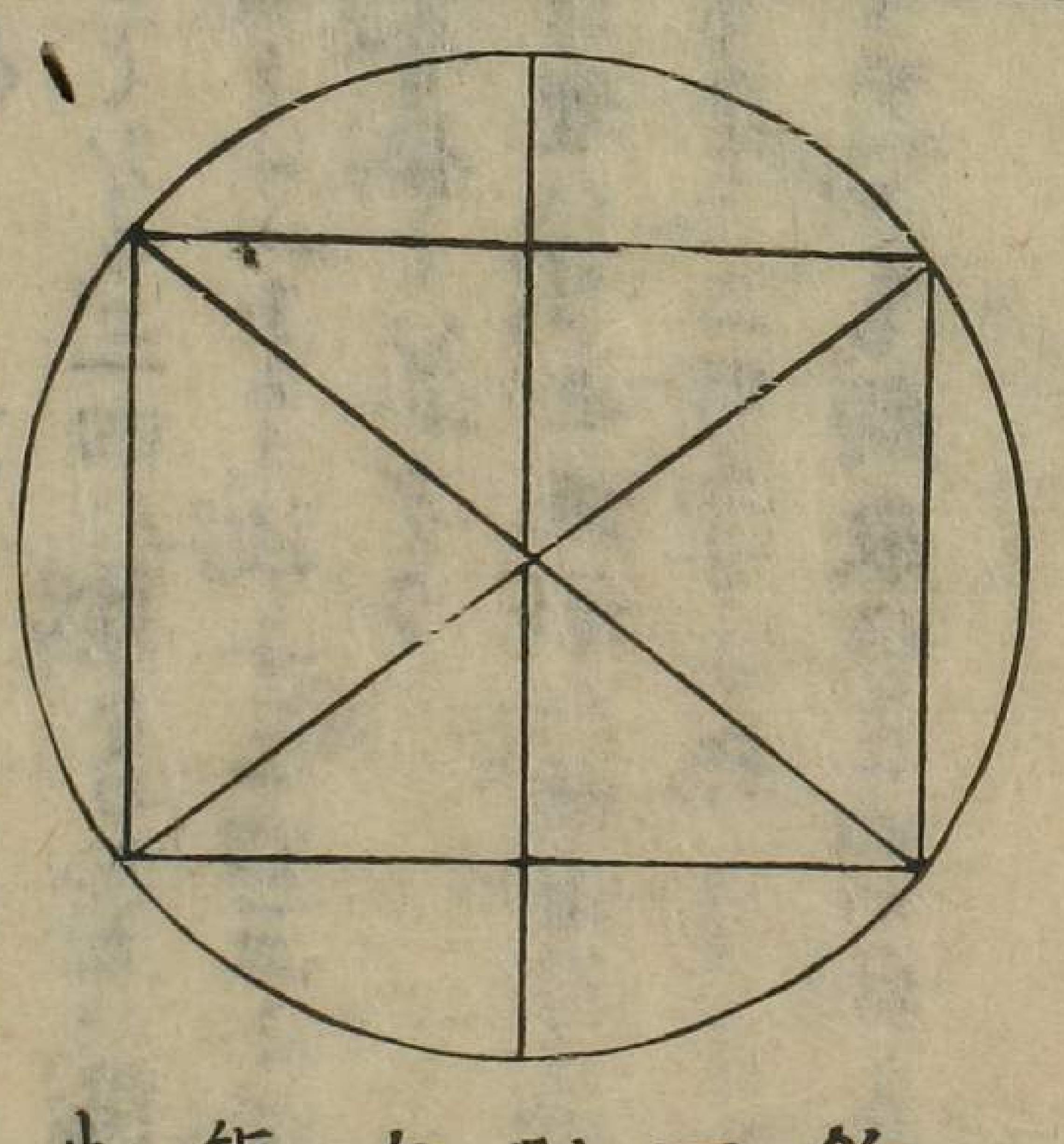
法ハ紙を縦ニ折て墨ニと引き。其墨ニ合せて横に折て。墨を引けバ。乃十字の形となる。是併真矩の根元なり。扨此真矩を得ること。圖のごとく。鈎を三寸とし。股を四寸とし留て弦を引渡す時ハ五寸なり。是を本とし。然といへども。寸尺を用ることハ。三四五其寸ニ合ざること多し。是曲尺の誤ある所なるを（三四五寸に合ざる則ハ天地の理ニ背くなり　昌弘曰此言古傳の云処なり姑くこれニ随て記す）渾發の理ニ寸尺間町ニ拘らバ。是を開て寸尺間町に名く。妙用其中ニあり。今渾口を開て鈎と三ツ計り。又股と四ツ計り而して弦を引渡す時ハおのづから。此弦寸彼渾口ニて五ツあること毫髪も差なし。故ニ寸尺間町に拘らずして。唯三四五乃矩といふ意味深し。猶口傳云云

平町の始ニ解する所。見込を矩とし。陰ニ用ひ見返を規と

して陽ニ用也。即此理也。天文ハ陽ニして円なり。地ハ陰ニして方なり。故ニ股鈎を陰とし。即矩なり。見込なり。弦を陽とし。即規なるを。見返なり。故ニ首尾形（古傳ニ見込見返の編口を首尾の形といふ）と規矩合体といふなり

古傳云。或問曰鈎股を真矩十字の本なり。陰の理明けし。弦ニ於てハ陽の形なし。此理如何

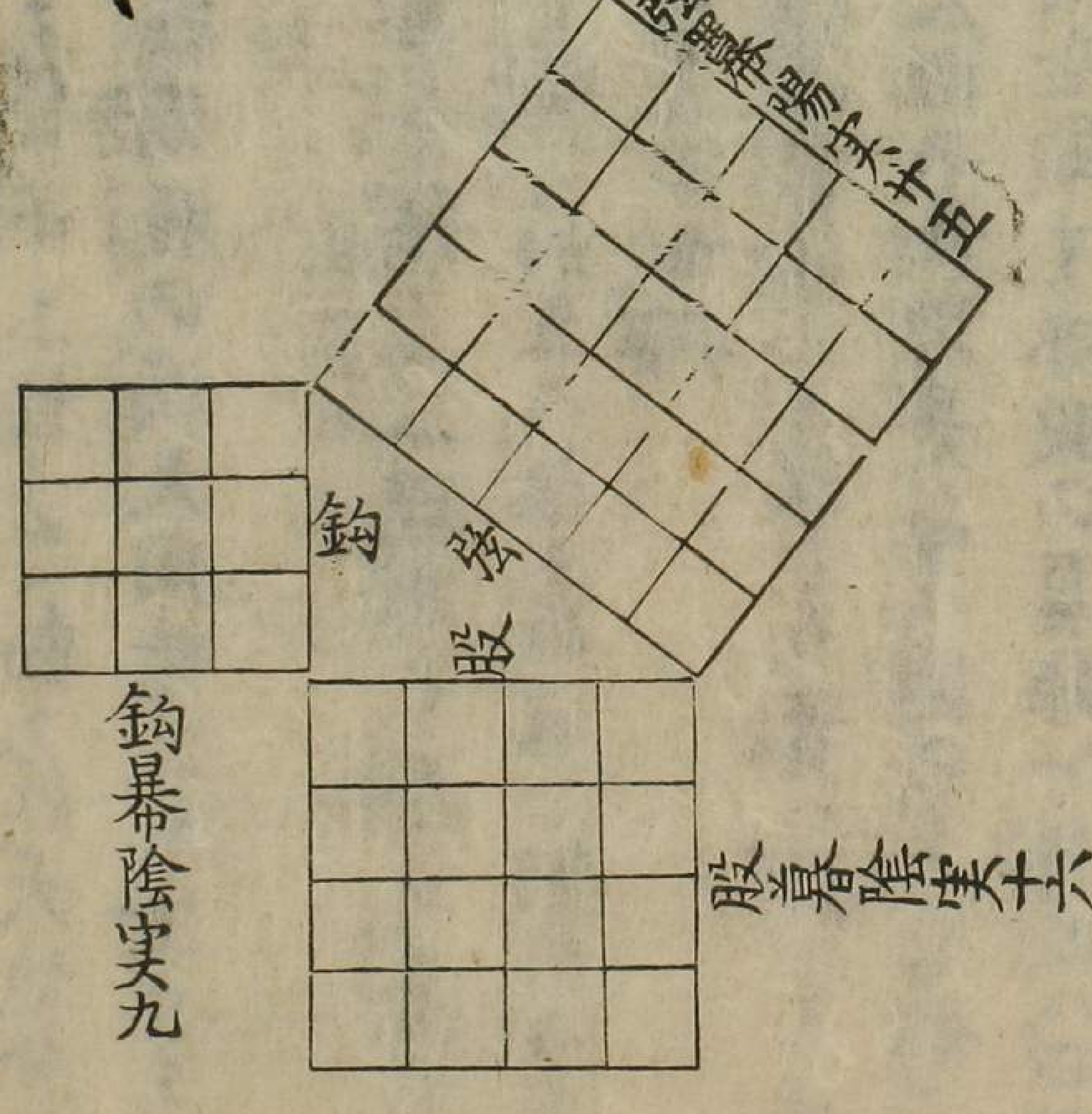
答曰天圓の中に地方の縦横を取て円径を引渡す時ハ。圖のごとく。八段の尾首形を得。或ハ天径一



鈎三股四弦五則天地方円規矩之理也

尺ヲ結る。六寸八寸の縦横なり。正中より十字の徑とひれ
つくじとれハ。各三四五寸となる。三四ハ陰なる。五ハ陽なり。即
圓徑なり。故ニ見返を規といふなる。次ニ三四五ニ満る理是
なり。故ニ尾首形の規矩合体といふなり
又問曰天徑一尺ニ鈎股の理ハ可也。地形ハ四方なるべし。縦横
取て而も六寸八寸ニ極ることハ。三四五寸ニ作るがごとし。若四角
ニ取ハ則強ハ五ニ叶ふといへども。鈎股の三四ハ乱るべし。此
理如何
答曰六八ニ作る物ニ非ず。自ら六八ニ満るの理なり。謂ハ
天一を生ずるの理形を以て是をいへバ。又十分の一と下す
ごし。然ときは上下ニ一寸づゝ生じて。中ハ八寸自定る而して
其八寸ニ木を凹て満る所の真矩を求れば。横の六寸目

出来ず。是天地自然の理なり。然る時ハ各三四五寸を得たり
故ニ一よりして。二三四五迠を生数といふ是なり。而して六より
まて。七八九十迠を成数といふ是同じ。右の図ニ一よりして十数
迠是なり。並ニ四方なり。八
極あり。北極南極の気徑
なるを。黄道の徑あり。天地
合体理即是あり。天文易
道の理ニ同じ。猶口傳
問曰上下ニ一を生ずる此
理如何
答曰東南の二州西北乃
二州。昼夜を分つ世界ニ



方あるがごとし。地ハ陽に包まれて中に住して動かず。天地分つ時ハ世界一同なり。故に北極南極の両天同時二を生ずるの理なり口傳深しといふ

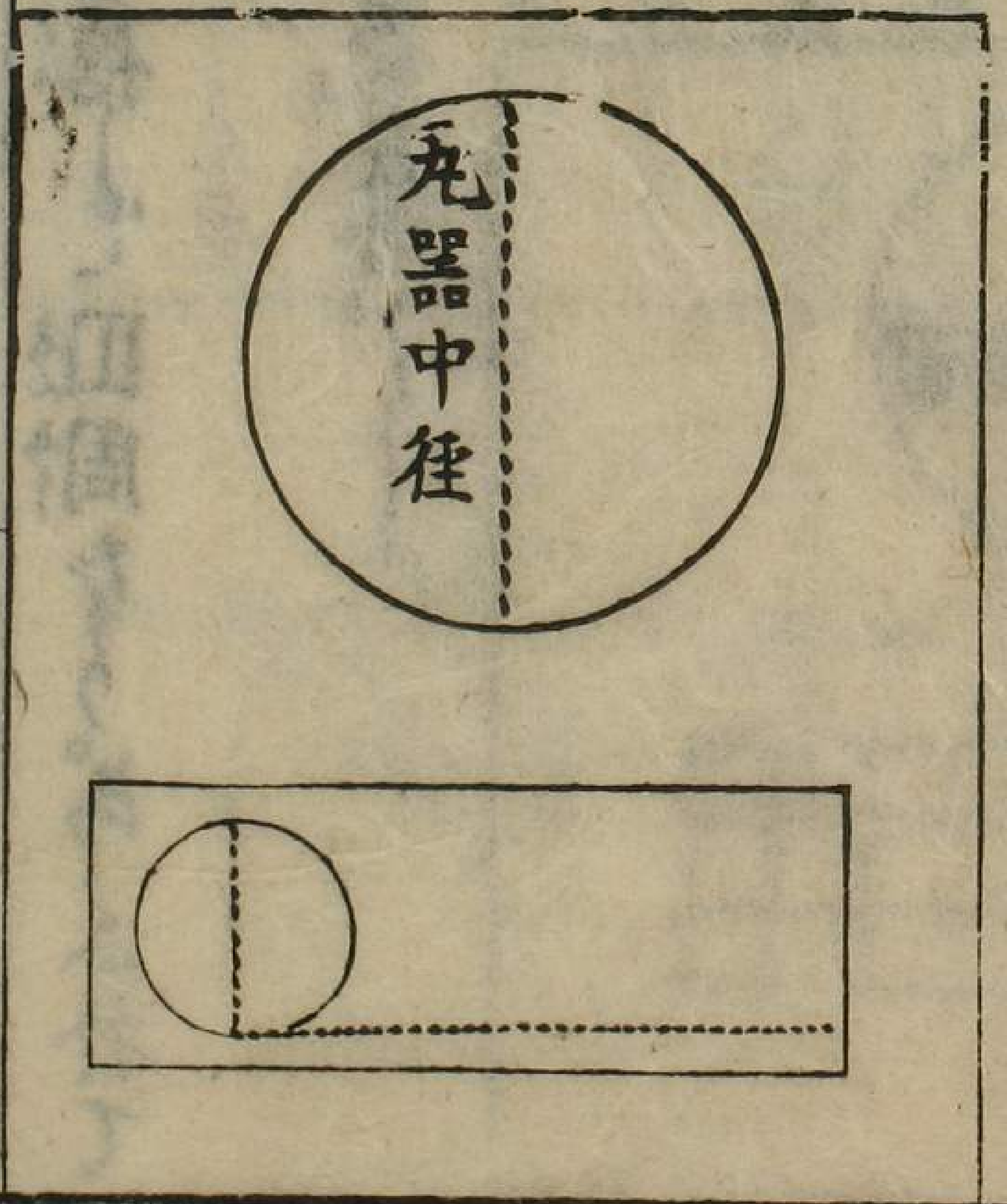
古傳云問曰。尾首形を規矩合体といふ。理委く尽さば。蓋平町の始より尾首を得ること。必三四五に限らず。或ハ鈎股に長短あるも。陰陽に合する理ありや如何

答曰此理至極なり。即陰陽の實通ずる理なり。實ハ誠なり其實を顕す者ハ真矩なるを。人心の矩即是なり。図のごとし。鈎乃真矩を得時ハ三三九の實を顕す。亦股の真矩を得時ハ。四四十六の實を顕す。鈎股倶に陰の体なるを。故に鈎冪九ッ股冪十六倶に併て二十五を得より。是則陰實なり亦弦の真矩を得とれハ。五五二十五の實を顕す。是則陽實なり然時ハ陰陽等数を得なり。故に規矩合体する理なり。或ハ鈎股に長短ありといへども。弦冪の等ければ更に甲乙なし。真矩に背ざるをもつて本とするなり猶口傳

圓理　二術

渾発術をもつて圓の周と和の術を問答左のごとし

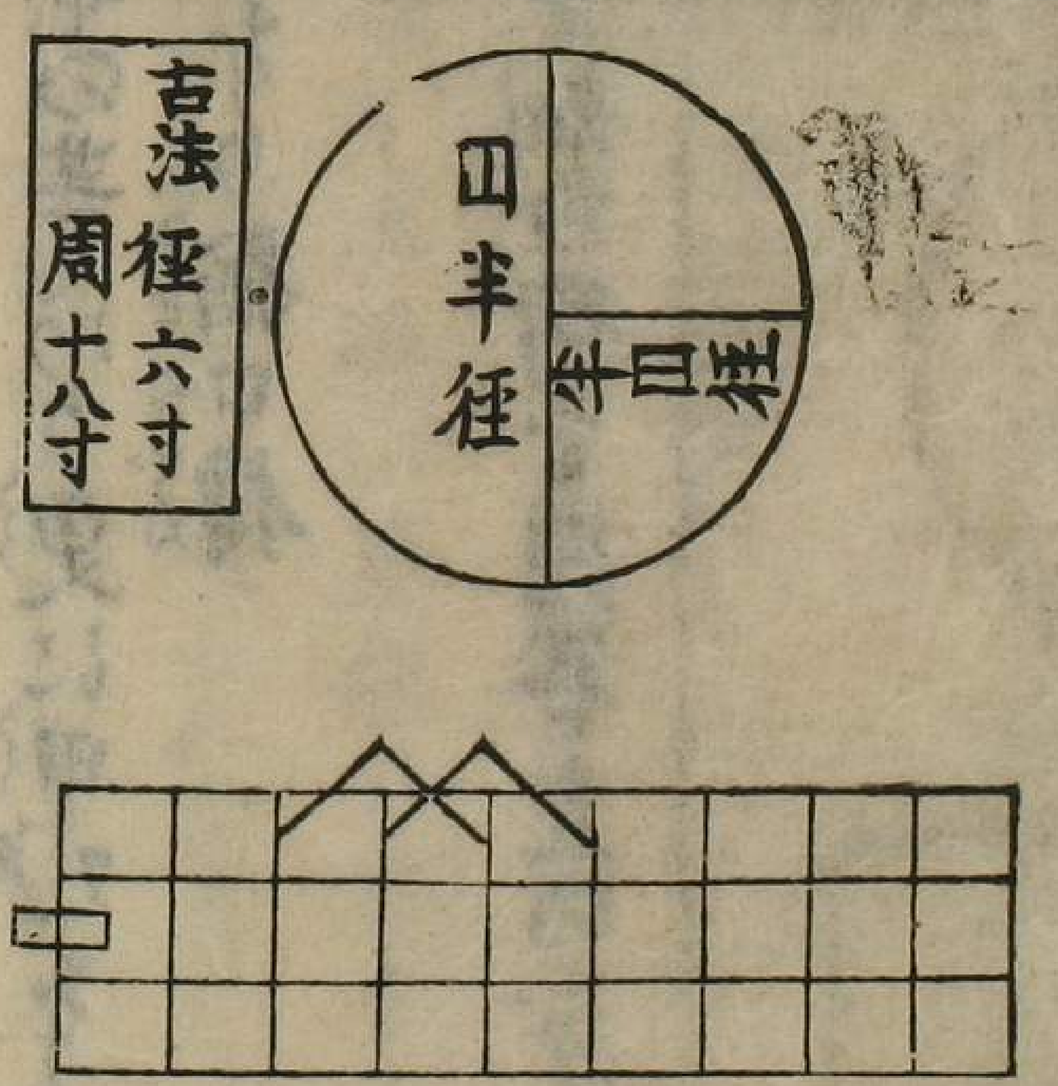
術曰丸器 盆盂の類仮に用ふ の中径に墨を引き。又別に板なくも紙にても。図のごとく真矩に墨を引。扨下の直なる所り置此墨條の留に丸器中径の墨を能合せ而して半周を搏じ尽し。中径墨と又能合



すとき乃大成す。此半周を倍して円周なりとあらふ於て問ニあらふ

円の歩を知る術を問　答左のごとし

術曰円の半径ニ図のごとく墨を付け。是を前術のごとくして紙上ニ搏じ半円周して墨をつけて。是則長さなり。又円の中より半径を横とし。是を幅とし。△の墨の長さハ円の半周也。右搏じたる墨なり。扨図を得て歩数を知る□此墨の長さハ中より半径なり。後ニ得る墨なり。茲ニ



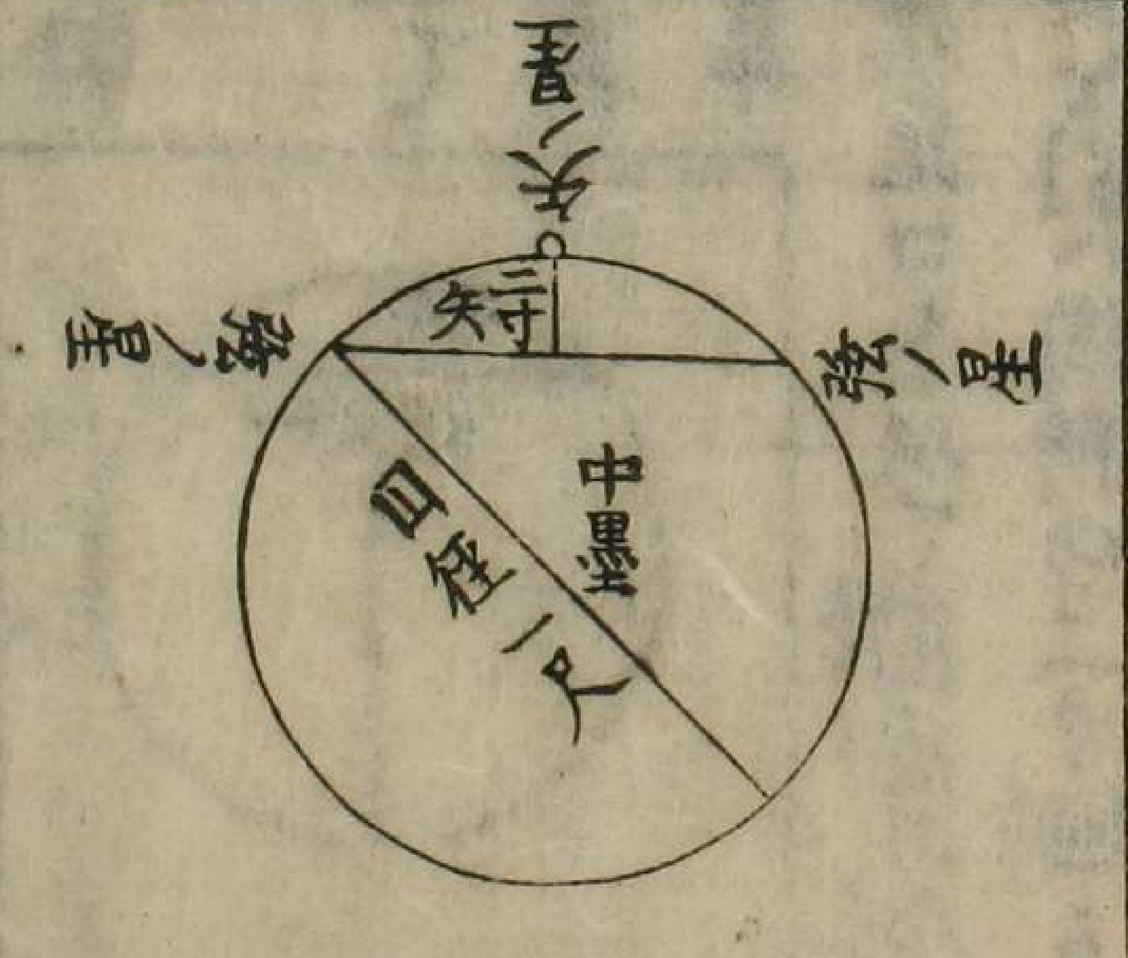
おいて問ニあらふ

径矢弦　二術

径矢あつて弦の寸を問。或ハ径弦あつて矢の寸を問。或ハ矢弦あれて径の寸を問。三術倶ニ渾発を用ること同意なり

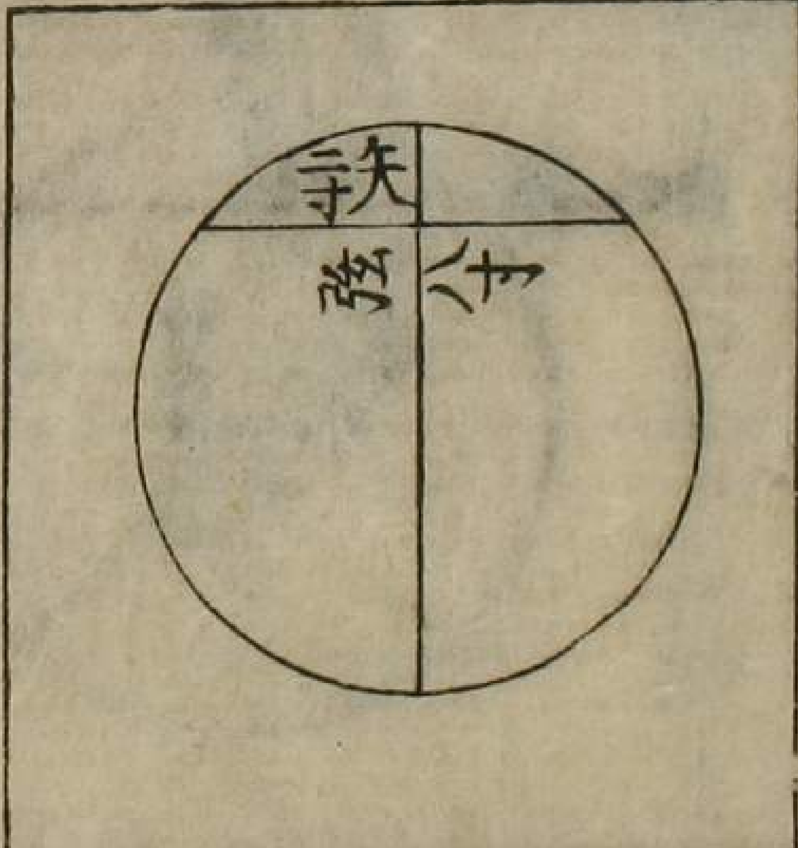
今問平円の闕矢二寸。弦八寸あり。径幾乎　答曰一尺

術曰真矩を設て渾発の口一寸なし真矩の正中より。左右へ四ッ計て星を突留八寸の弦とし。又中墨より上へ二ッ計て戌二寸の矢とれ。然してまく別ニ渾発を開き。中墨の條とニ矢の留め星と弦の留の星と合所より平円を廻し。實の円径一尺を得て問ニ答ふ



今問假令ハ囗径一尺ニして弦八寸ニ切て矢寸幾干　答曰二寸

術曰真矩（真矩とハ曲尺なり）を識て渾発を開て一寸とし。此口を以て中條より五口量り其五口を一口ニ合せて。平囗を廻せば。一尺の平囗を得るなり。扨別ニ真矩八寸口を設け。此口を以て囗周の合所乃八寸の弦なり。是より真矩ニ矢の條と引ハ問所の二寸顕る

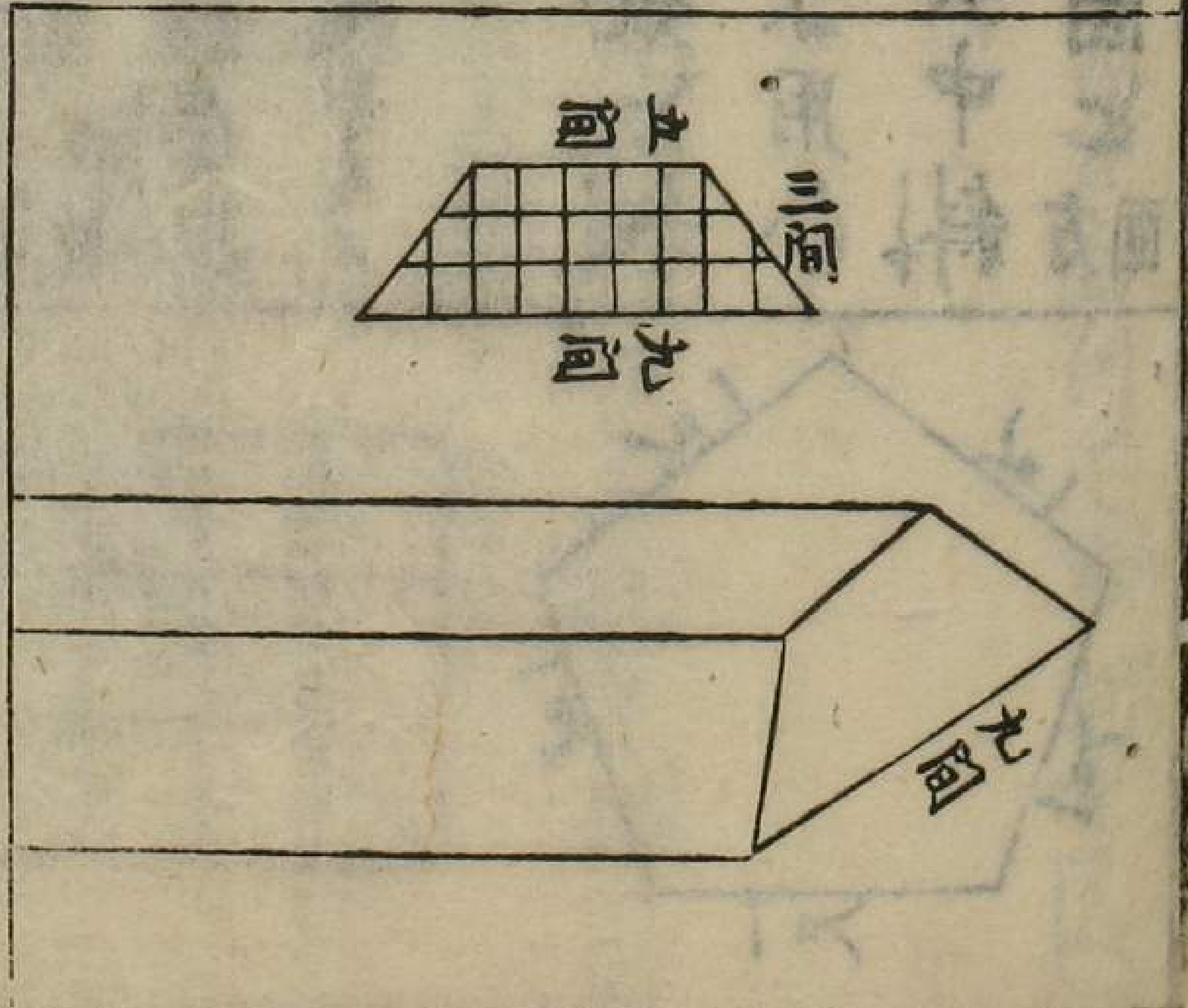


坪詰

坪詰とハ或ハ錐形椪形。或ハ菱形庇狭等。土岸石垣堀壕築山等の坪を積ると云。但平歩を詰ると云とハ少く異ニして大小同じ

今問土岸あり馬蹄五間敷九間高三間長十五間あり。此坪幾干　答曰三百十五坪

術曰渾発を開き。一間の口と定め馬蹄五間敷九間を計りて倶ニ合をしれば。十四を得る。此十四を折半をれば七となる。此七ツを竪とし。右の高三間を横とし。坪ニ詰まバ。即小口平面乃坪廿一坪あり。是を長く引き延ぶときハ廿一間なり。即是を竪ニもちひ。扨土岸の總長十五間を横として量まバ坪数三百十五坪となる也。図を見て辨ふべし。餘もまた是ニ準ずべし



歩詰角形　二術

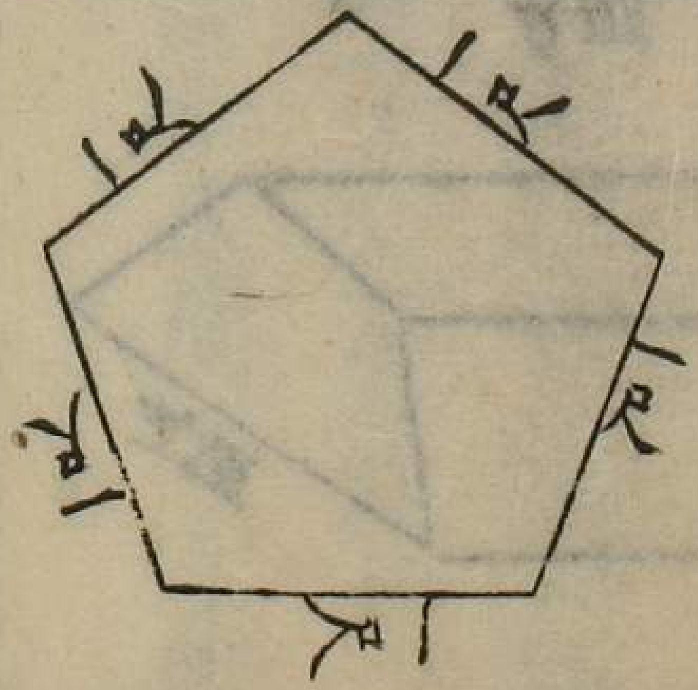
今問曰三角形歩詰（四角縦横の歩詰ハ記ニ及ばず）鈎三間股四間あり。其

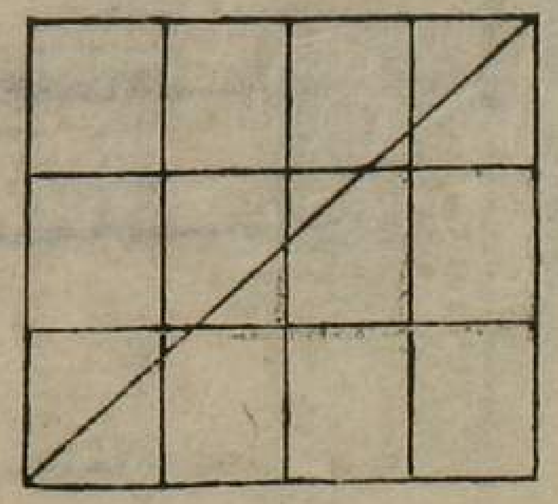
歩幾干　答曰積歩六歩也

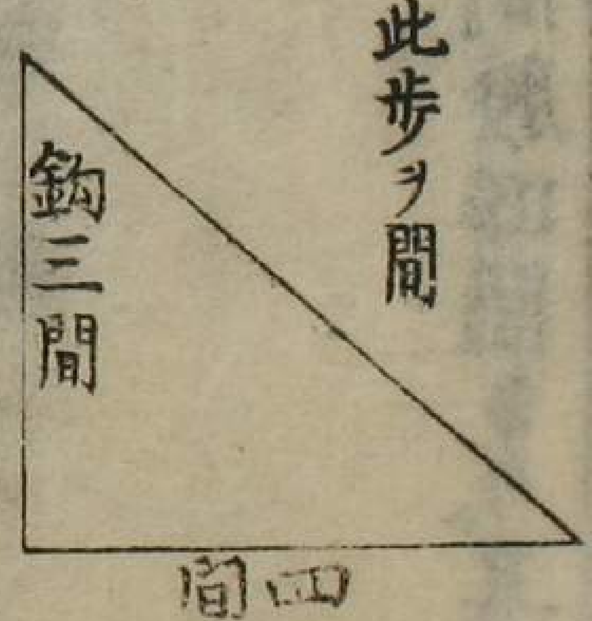
術曰渾発を開き間尺（真矩の尺なり但今いふところの一間なり）用て股四間鈎三間計つくり縦横に形を極る時ハ積歩十二歩あり。是を隅より隅へ斜に半減して歩積六歩を得て問に答（一倍の数を得る故小図のごとく半減しても歩数を知るなり）或ハ平錐山形菱形斤狭等の歩積を知るにも各同術なり

又問五角形の歩詣如何

術曰或ハ一面一尺づつの五角の歩数を知んとおもふ五角の形を極め其一面を一尺に用ひ十に割て寸の口を定むべし。扨其中斜（方）を得て是を五つ計て長さとして半面を（面）







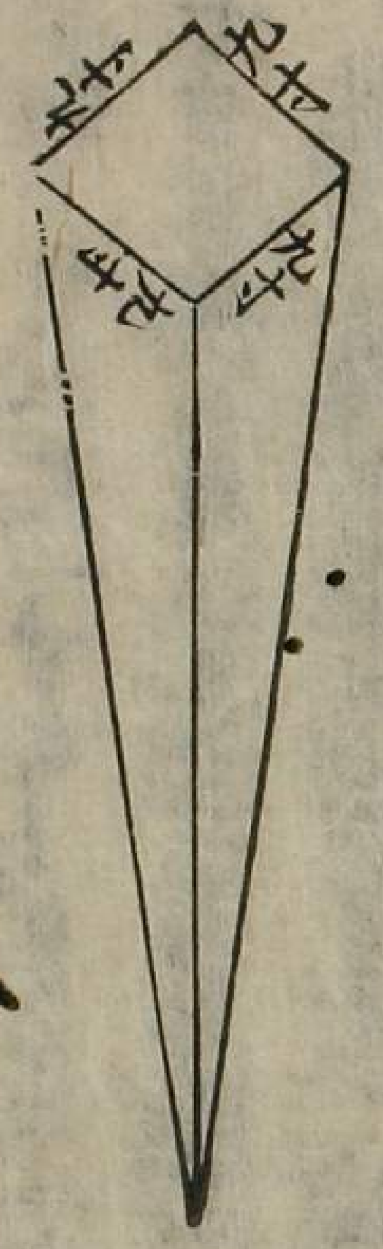
一尺の半あり横にして右の十に割る寸の口とを以て歩割とすべし

何程までもかくのごとし

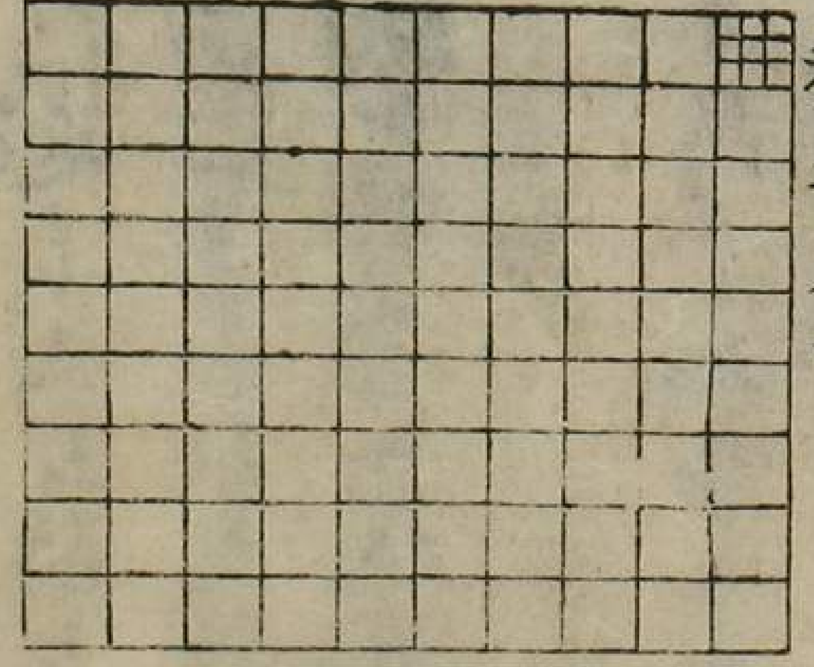
錐形

錐形といふハ或ハ上方にして下鋭に或ハ下方にして上鋭なる（倶に同）理なり四方錐あり三角錐あり楔形あり同術とこゝろうべし

今方錐あり四面九寸長三尺也其積幾千と問　答曰八百十歩



四面方錐



積毎九歩

術曰渾発を開き。一寸れ口と定め。是を方面九寸に延し。又方面九寸を合和して八尺一寸とし。是を三に除すれバ二尺七寸となる。即二尺七寸を横に用ひ長三尺を竪に用ひて。墨線を引ければ八百十歩を得て問に答ふ圖を見て知るべし

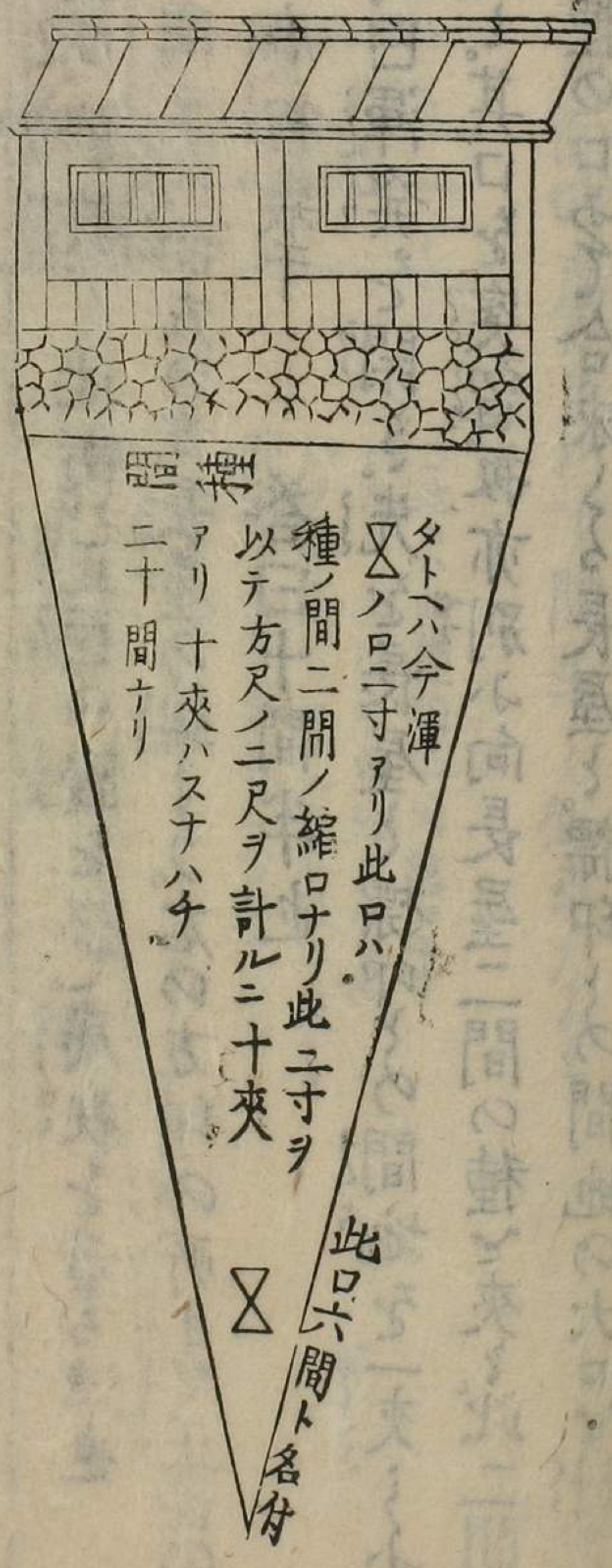
又三面錐の積を知ることは。三角の法を以て知るなり

尤三に除して。前術のごとく。歩積を得て問に答ふ

平面遠近

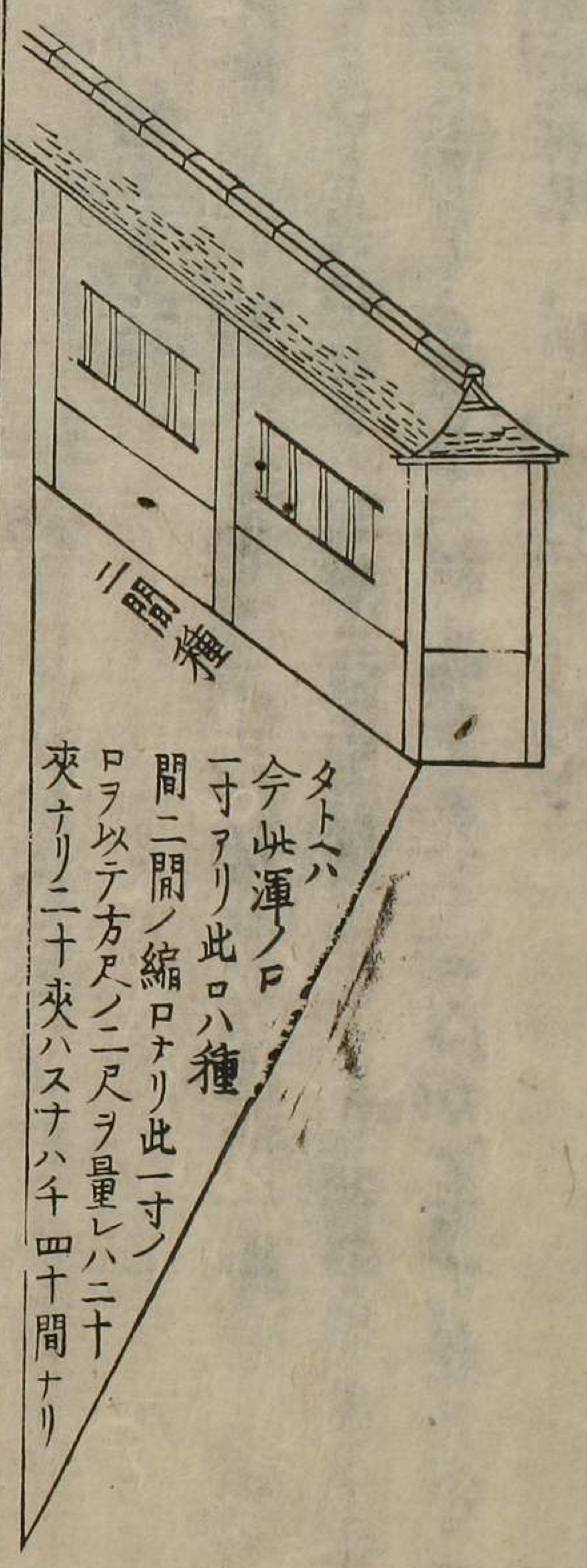
此術ハ向面の種を以て。遠近を量の法なり

術云向の種間二間の左右を。本座より渾発の両鋒まで夾ミく。其渾口を種間。二間とくらべこれを以て頬尺二尺を量て遠程を知なり



斜面遠近

此術も亦前術と其事理一致なり。只向の種間二間斜面なるのミ前に反す。尤渾発を斜になして向の斜面に合如働すれバなり。是も又斜面を夾ミれバ口を以て頬尺の二尺と計るなり。即遠程あらはる



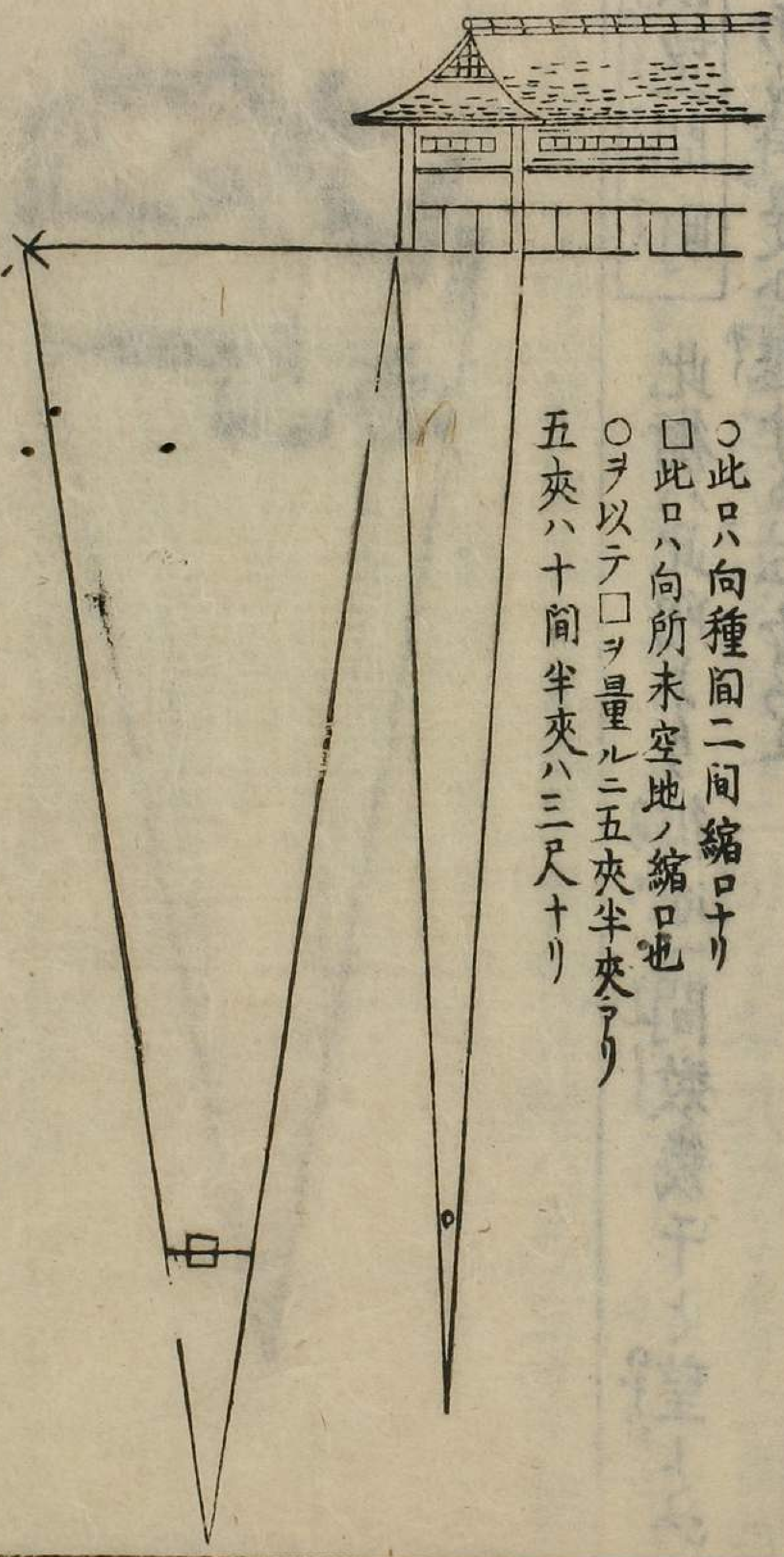
正面廣狹

此術ハ正面の種を以て。廣狹を量る法也

問云向面左の方。長屋の端より。右の方印の所まで正面の廣程幾千

荅曰十間半也

術曰渾発を開き。先を長屋と標印との間地を。一夾ミに夾ミ。其口を突留。扨亦別に向長屋二間の種と夾ミ。此二間の種の口にて合求むる長屋と。標印との間地の大口と計て前面の廣さ纔十間半と知るなり



斜面廣狹

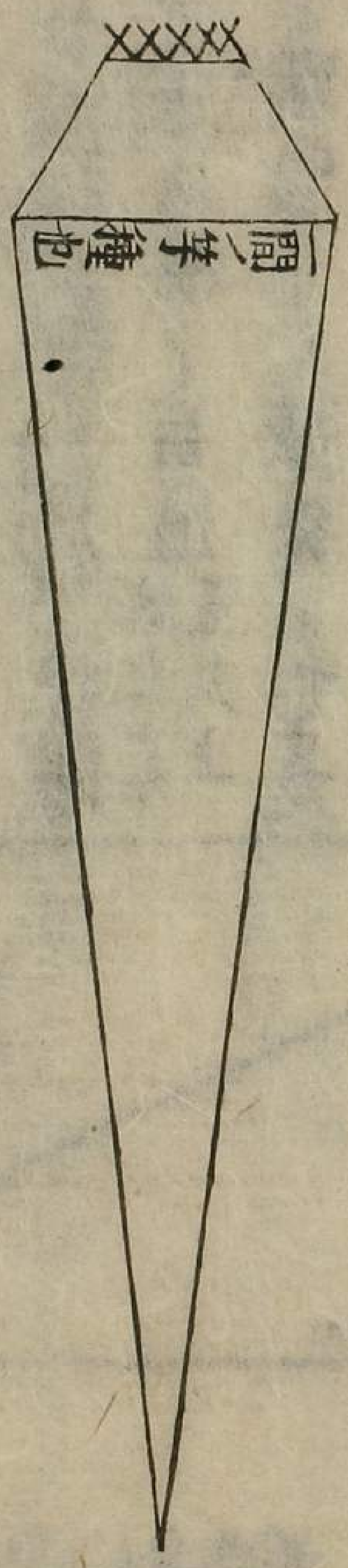
此術も亦上に所謂。正面廣狹の法に同じ。因て其巨細を贅

す。其術大成の理ハ。前件ふ所謂正面廣狭の術。又斜面遠近の法を照し考ふべし

横望間町

此術ハ此所より彼地へ間数幾千と望ミもの
ある時。是ふ應ずる法なるを

術日渾発を開き聞ちし。是を以て方尺の横手より望程計て。其留ふ渾発の鋒をたゞし込て見る也。今十二間先を望ハ渾発を開き。其口まて方尺を十二計至。扨其所ま至。一間棹を持せ先へ遣す。右渾発の口ふ合ふる所十二間と知る。尤違ふるゝを見る時ハ。竿を立て見也。若長間の時ハ。先の竿を二間ゝるを二間ふもすゝなるを

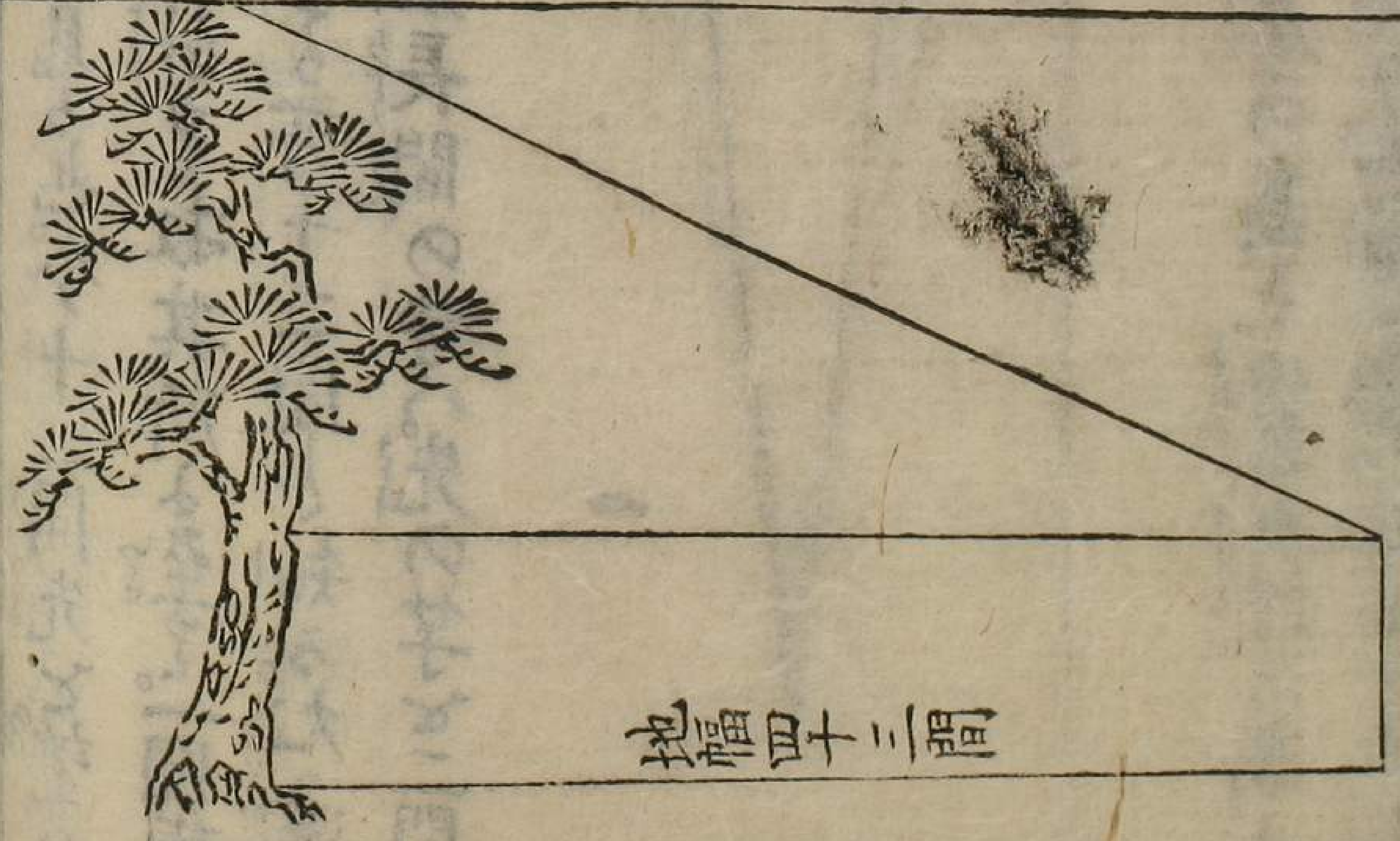


知諸高下

此術ハ城楼堂塔の高。竹木家屋の高さ。山岳丘径の高さ
総じて高下を求る法なり。尤豫め地幅を量つて知つもくる

上の術なり。地幅とハ。此所より彼所へいづれにても。其量るべき物の地下までの遠程のこと也

術曰（今図する所をかりにいふなり）先地幅を四十三間と知（是ハあらかじめ計りて知りて置なり）扨渾発を開て。本の根と目通（地上より五尺上）といふ當を圖のごとく。渾発をもて是を夾み。其口を紙上に突留て。扨方尺ハ地幅なるゆへに。新に方尺を四十三間の地幅に計りを合せ。その今計合せる渾発の口をもつて右夾みし突留たる大口を計りて其



に居する長を加入し木の總高と知るなり

若此術違ふることを試んと欲せば。右の方尺ハ地中四十三間に准じたる方尺なるとは則是を地中に用ゆ。渾発の口ハ方尺二尺を地中四十三間に計合せる。一間の口を用て向の木本へ一間の竿を立させて。是を夾み見るに。右渾発の口に竿の一間必至りて合ふるときハ。違なきを知る（尺をもて地幅を計りたる時ハ尺をむかふに立るなり）

極諸高下

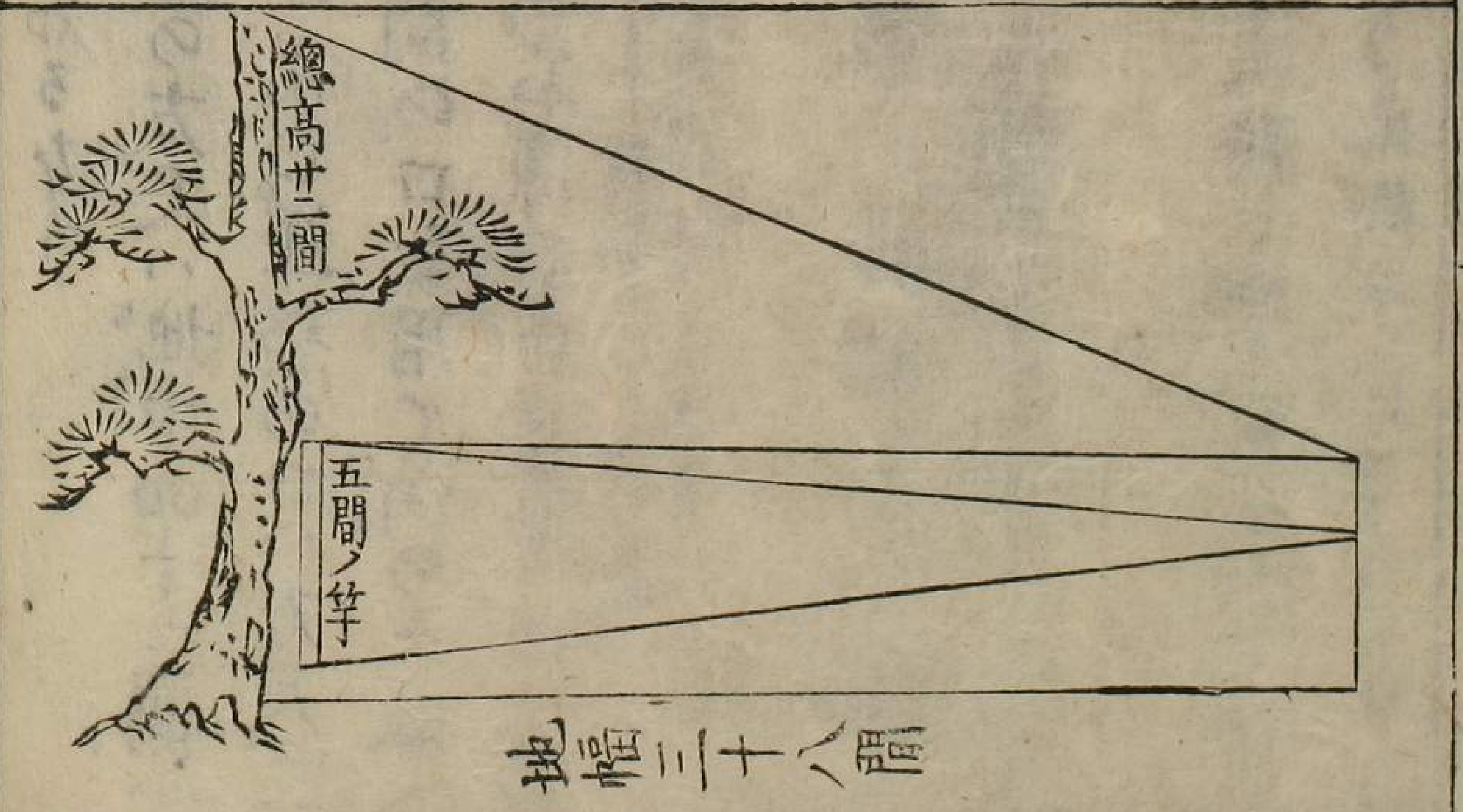
此術ハ兼て量りを置たる諸高下残重て又齟齬なきことを試ミ見る法なり。其事右にも粗記したれども贅言に似たりといへ共旧法捨るに忍ず爰に贅す

今左に圖するごとく。兼て地幅を三十八間と知りて又高下の術にて木の總高をも廿四間と知るなり。此術若違なきことを改

然見ゆなり

術曰先木の高を廾四間と知る。扨右の三十八間の地幅に方尺を計合せたる渾発の口（此口ハ一間の縮口を五ッ合すれバすなハち五間なり）と五ッ計合せ。其五の合たる口を以て向ひ五間の竿を立させあるを夾ミ見るに。其渾発の口向に立てる五間の竿に必至と合ふときハ。術に誤りなきと知るべし。猶前件を照見すべし

一傳に云。此術ハ片極を竪に用る理なり。或ハ天守矢倉の重々を糺し。又三分一五分一等を求る所に答ふなり



故に指高何分ともいふなりと云云

天口 進で量るを天口と名く 陽ハ進むの謂ひなるなど

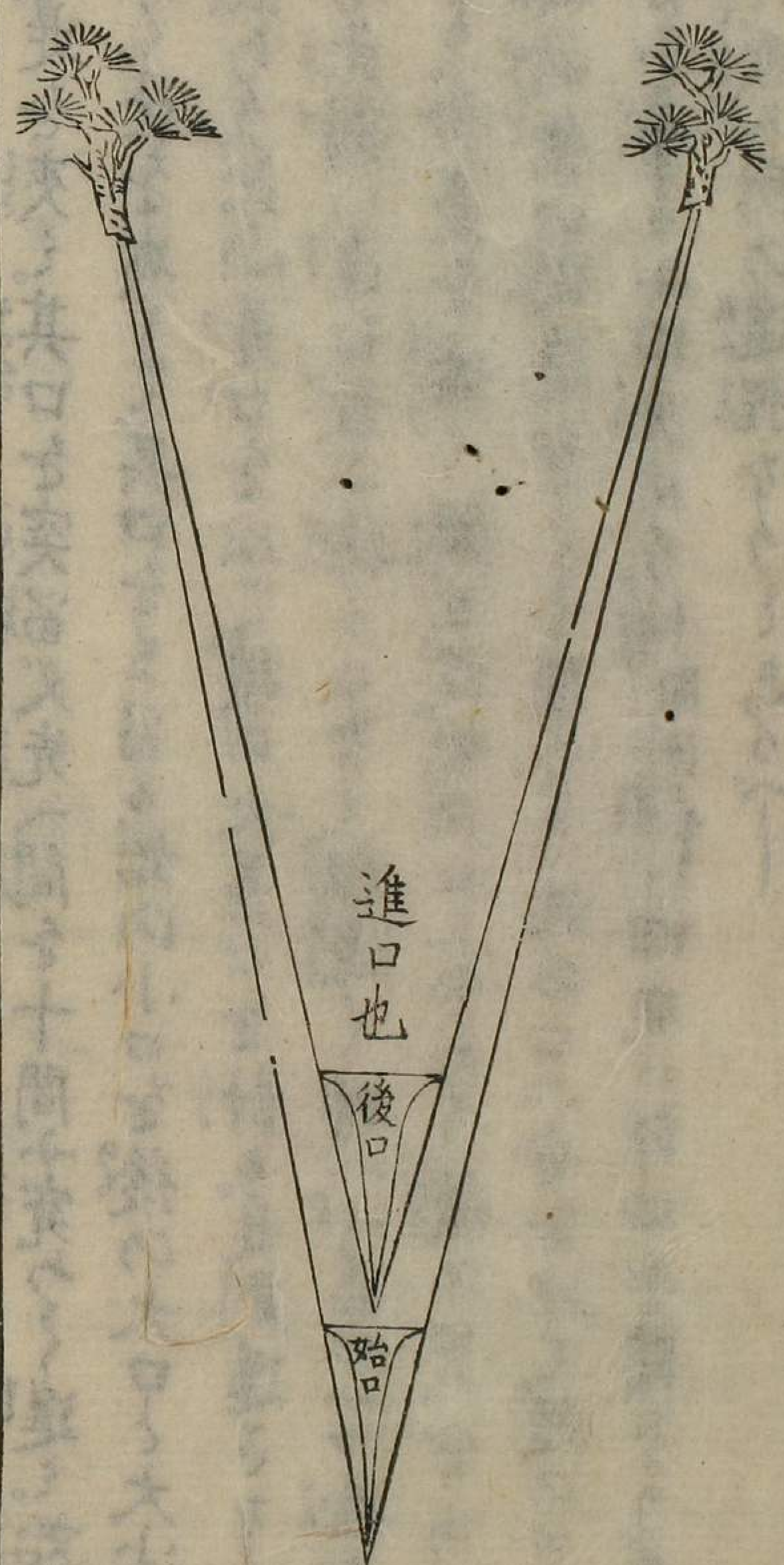
此術ハ進で遠近を知の法なり

今図する所を以て云。向正面左右に二株の松あり。渾発を開きて是を夾ミ。其口を突留。又先へ間を十間に究めて進ミ。始の如く長を夾ミて。其口をも留る。始の小口を後の大口と大小の差あり。此小差口を以て後の大差口を計る。是則遠さなり尤此圖ハ進む故に捨る口なし。但退く時ハ小差口一ッ捨るになり。今是を委く解せば。始の口二分あり後の口八分なり其前後の間進むこと十間なり。始の口二分を以て後の口八分を量るに四夾なり。但し一夾ハ十間ばかり 四夾ハ即四十間なり。是即求る所の遠程なりとするべし

地口

退て量るを地口と名く陰ハ退くの謂ゟ

此術ハ退て遠近を量る法なり。前術の天口と。其法同㕝也と意得べし。天口ハ進ミ地口ハ退くれ違あるに因て差口を用ると捨るとの別あるまでなり。天口地口互ニ考合すべし

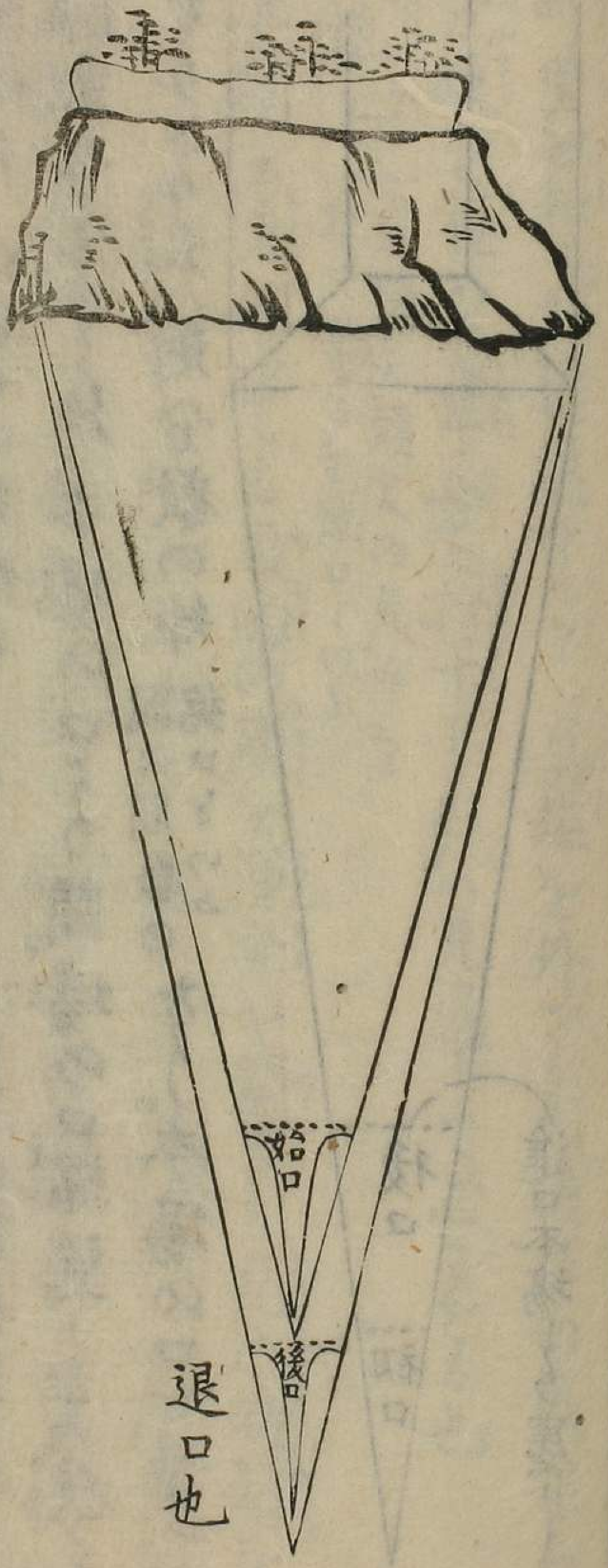


天口

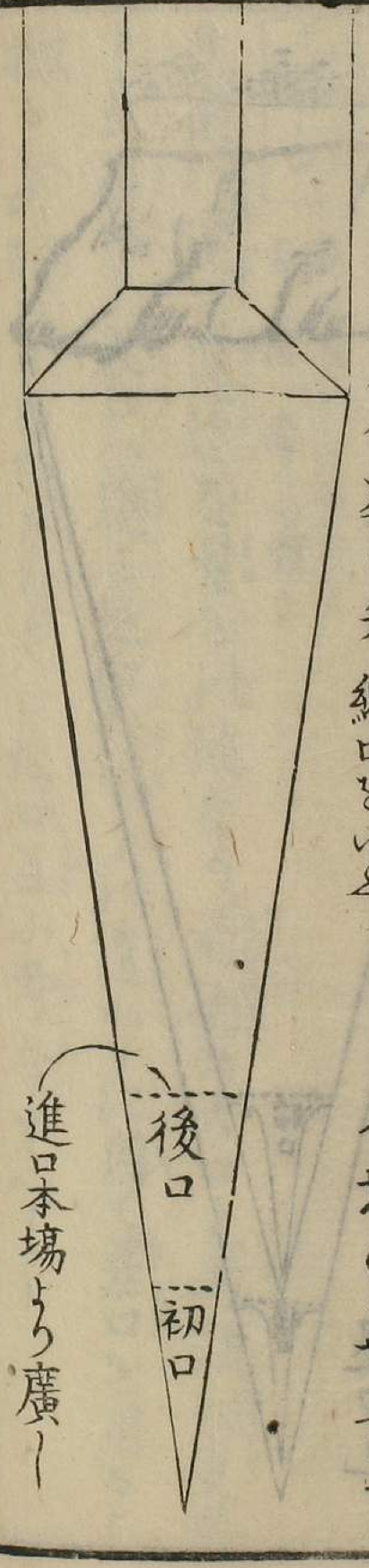
或傳ニ云渾発の差口を高く量るを天口といふ

傳曰本場より進退の分数間のハ。見盤ニ倍して。六十分一と用ゆ。凡四十分の一なる時ハ差なし

術曰先目的まで空眼を以て。何十何町と考へ。扱鏁ヲ渾発指て目的の山ニても。峯ニても。木ニても。或ハ村里の境ゟ



境までなりとも。幅のあるものを渾発の口に合せて見込せ。假令
ば其口五分なるべし。五分を紙に突留め四十分一の分数を進
て。又見込ときハ。假令バ五分三厘となる。最前突留たる口にて
扨て。其廣ハ五分三厘なり即進所の分数開の間数なりの矩と知るべし。其
三厘の差口を以て本場の口五分を量りて。町里を求む。三
格渾発と作すの物。四の矩方尺を作すなること見盤の前後進退を
同意也。退くときハ。本場の口より開場の口縮むべし。其狹く
なりたる差ハ。則分数の矩開の間数縮口をいふなり。本場の口を量て

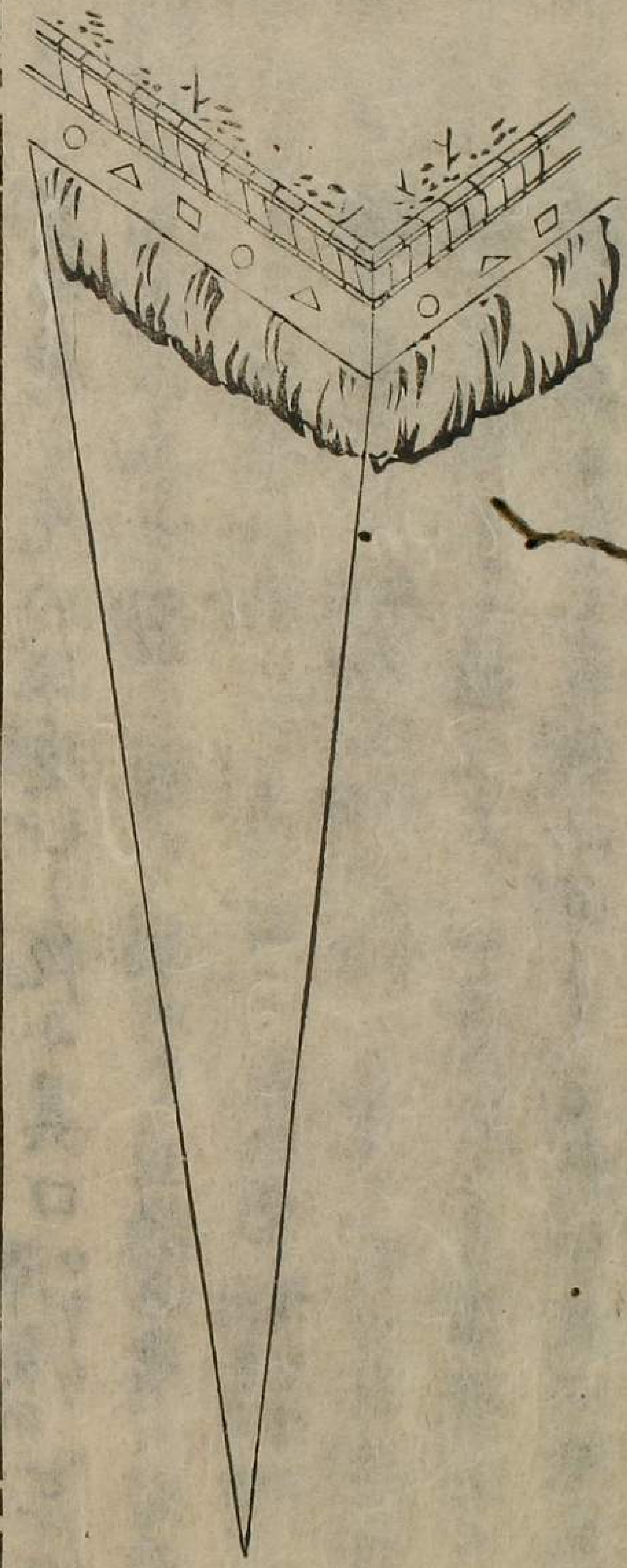


町里を知る。尤進退するとも真矩を外ざる也進退の真矩を
分数を極めて竿にて打すれバ見通して心すべき也

地口　或傳云頗尺の屈伸を以て量るを地口といふ

其術云先何にても目的の廣と渾発を開きて見込時。鏁を
二尺に定め得と見込。扨進むときハ其口渾発の口なりとは少も
齟齬せぬ様に其侭置て。鏁を縮めて目的の廣へ渾発の口
と合するなり。其鏁の縮る差ハ即分数の矩開を間数の縮を作すと以て
本場の鏁の長二尺。本場の鏁ハ二尺開場の鏁ハ縮むを量て町里の遠程と知る
又退く時ハ本場まて鏁二尺まて見込たる渾発の口へ合
するにハ。鏁を伸すなり。其鏁の伸る分。即分数の矩也。此伸
たる差の寸分を以て。本の二尺を量て町里遠程を知る。是も
向の鏁の差を以て量る故に地口と云。差の用ゆ天口と違

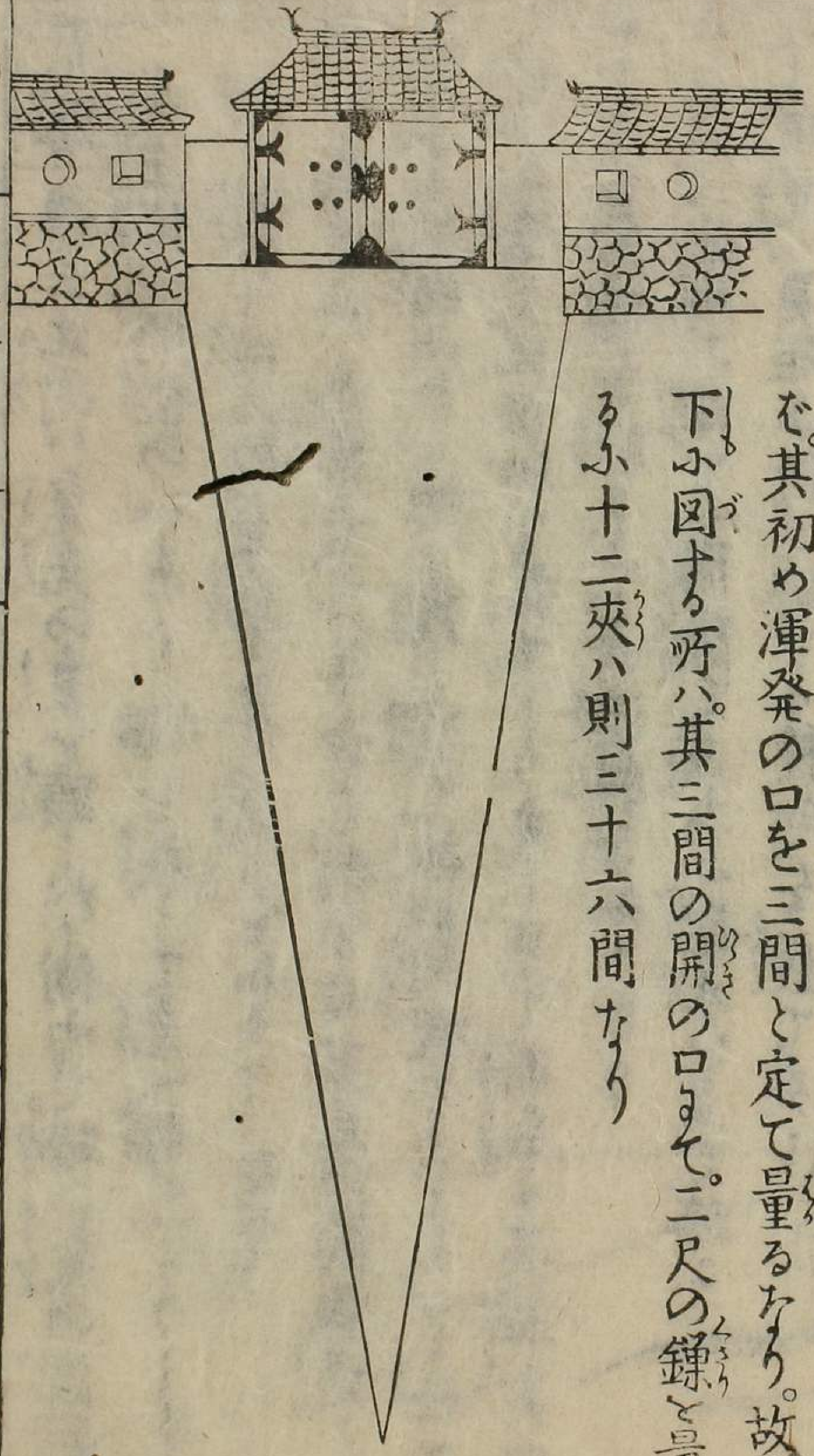
ハ四の矩の 天口ハ三格ゟて三ツ量つて 地口ハ四の差まて四を量る 故なり。三四五の理を以て真矩ニ進退することを考べし



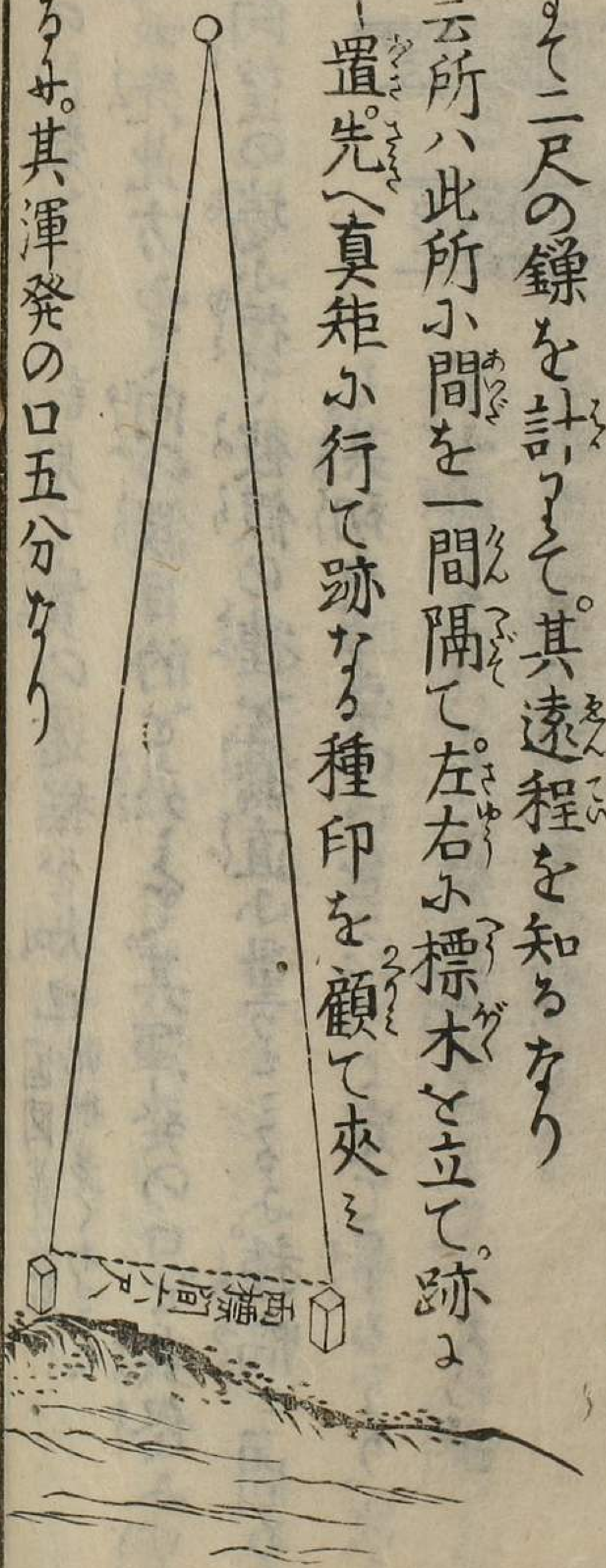
覔先

傳云此術を覔先といふハ。先ニ覔るの謂也。此より彼遠程を計るニ此方より間数の知る種なき故ニ。目的の方の目あき物と假の種ニ用ひ術を勤めて後彼所ニ至つて。彼假の種の間数を直ニ計見て。實の遠程を知也 国図等の節ハ此術多くあること

術云先此方ニて向の假目的と夾みて。其渾発の口と其侭ニ置扨向望の場ニ行て彼假の種を篤直ニ量つきころニ。種幅三間あむ。其初め渾発の口を三間と定て量るなり。故ニ下ニ図する所ハ。其三間の開の口まて。二尺の鏁を量るニ十二夾ハ則三十六間なり

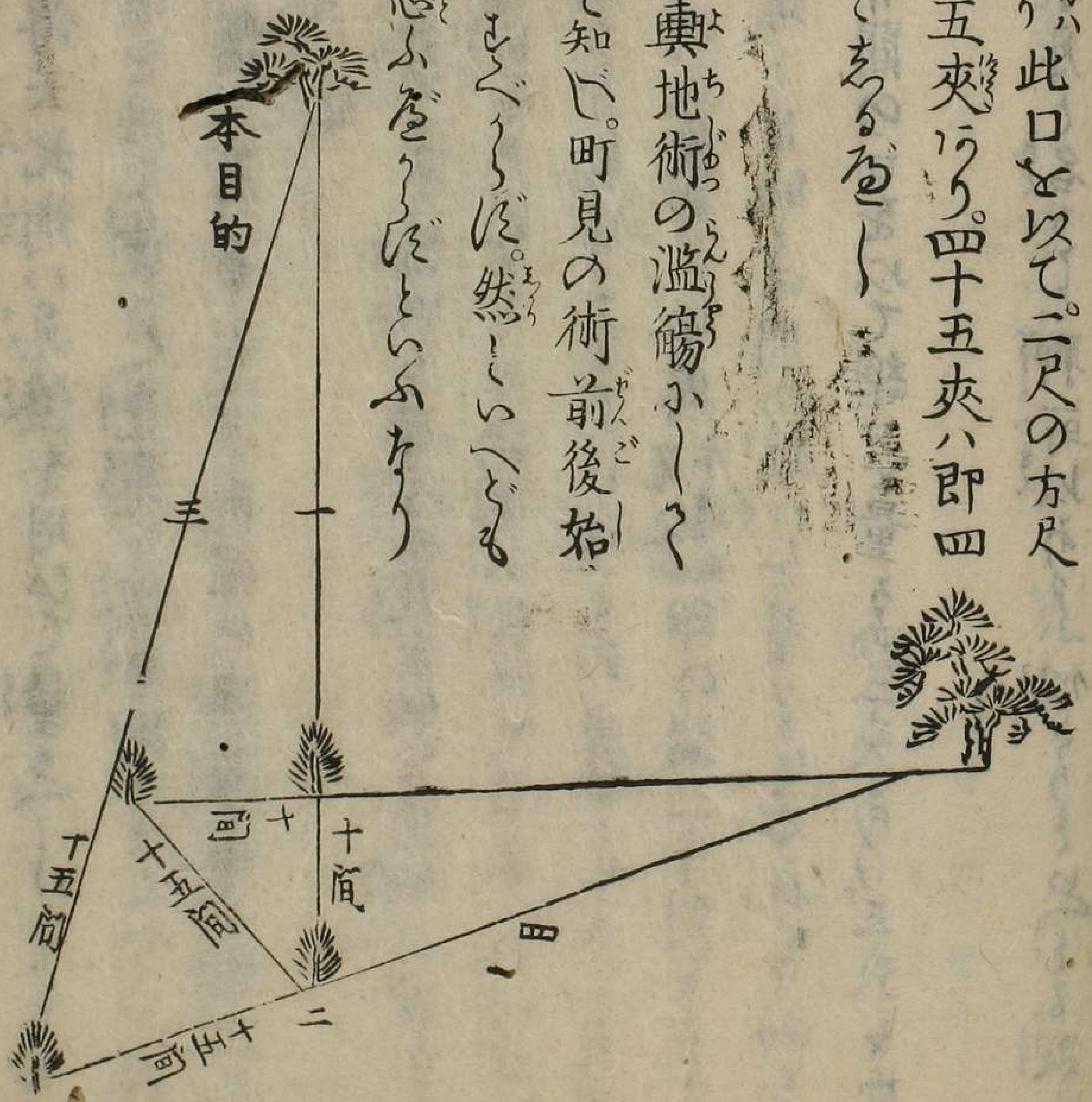


【覔跡】傳云此術ハ覔先の裏と顕しなる術ふて跡ふ覔の謂也
其法跡ふ間数の知まさるふ種を残して先へ行先ふりしく
残し置さる跡の種を夾ミ見て遠さくを知るこ〻となる
術曰此方ふ竹木まても又ハ竿まても何まても左右の間数慥ふ
知まさる目的ふなる物を残し置て扨如何程なりとも心ふ任せ
て彼方へ進ミ此目的を彼方より夾ミ見て而后ふ其渾発の
口まて二尺の鏁を計りて其遠程を知るなり
今云所ハ此所ふ間を一間隔て左右ふ標木を立て跡ふ
残し置先へ真矩ふ行て跡なる種印を顧て夾ミ
見るなり其渾発の口五分なり



此渾発の口五分ハ種一間の縮口なり此口を以て二尺の方尺
と量る時ハ四十五夾ゟり四十五夾ハ即四
十五間なりとするべし

【草結】旧傳云此術ハ輿地術の濫觴ふして
又能旧拾の本と知じ町見の術前後始
終此理を外ふをくべうざ然といへども
實測なるを惑ふ多うざとふなり

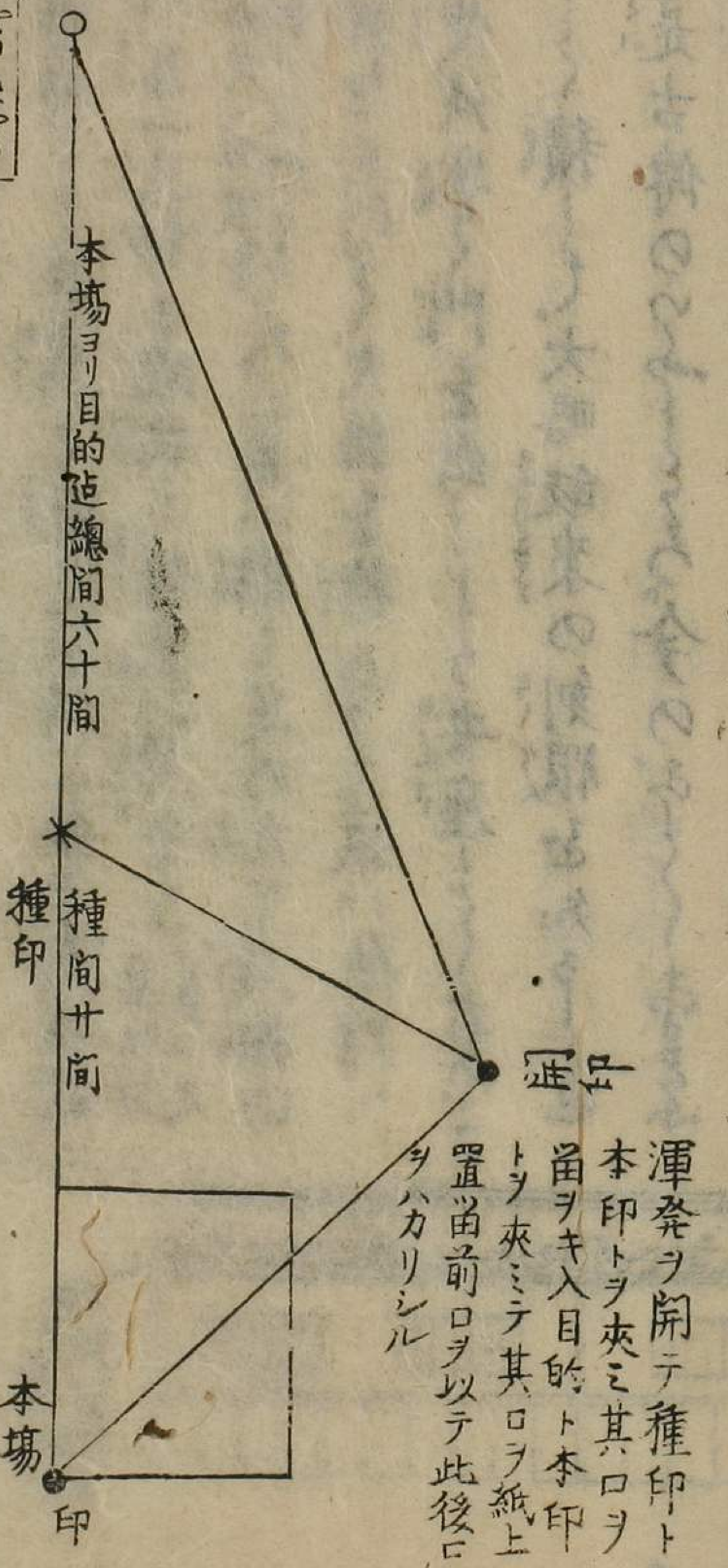


水月

古傳云此術ハ見盤を用ひて量るべしと云
昌弘曰見盤を用て量らバ豈是を渾発術と云んや今按ずるに全く見盤を用ひずして其術渾の事業にて明白也くはしくハ左に述

術曰今正面の目的まで遠程を量るに先目的と通例のごとく見込ミ扨新に種印を見込より廿間先に設けて然後又右の方へ横斜に進ミ開キ其開場より見込場と即目的とを夾ミ是を紙上に突留置扨又種印と本場（見込の本場也）印の間二十間を夾ミ此口を以て本場と目的との間の總口を量りて全体を知る
今此種の間廿間の口を以て總口を量るに三夾あり三夾ハ即六十間なり

或曰此術を水月と名ること聊所以あるに似たりといへども取に足らざる説なり古傳ハ鳴呼のこと多し笑ふべし



様脚

此術ハ向面の物蔭を人の通行するを見て其歩数と試ミ向面の廣さ幾干と知の術なり古傳にいふ処なり

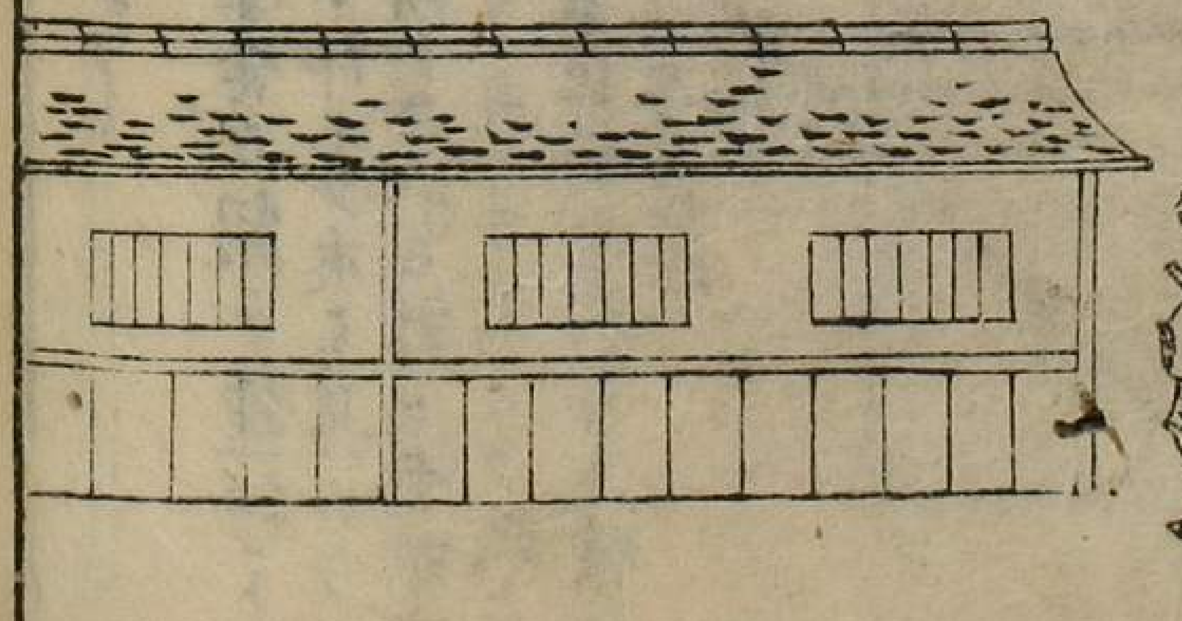
術曰古傳に云常に歩数を呼吸に合せて試ミ置て知るなり

大体一呼吸の間に遅きハ二三歩。速きハ三四歩也。其中を考へ量りて。是を以て糺し試みて。其廣程を知る也と云

又古法式傳云。森林の陰。土手の陰。長屋の陰。凡物陰を通る人を陰へ入ざる前に遠き所より望見て陰を通りをすぐる間安座して。其廣さ遠さを考へ知る也。其術一息一足呼に踏出し。吸に引考なり（昌弘曰一息一足の考へ呼吸を知ざるに似たり）又三足一間と定め。凡て用捨の理をわりて大格を積るべし。或ハ他所へ使者馳て門を出しより安座して右のごとく積りて。大略往来の刻限を知ると也

是古傳のいふところ。今のおしく考ふ

ちるさふ

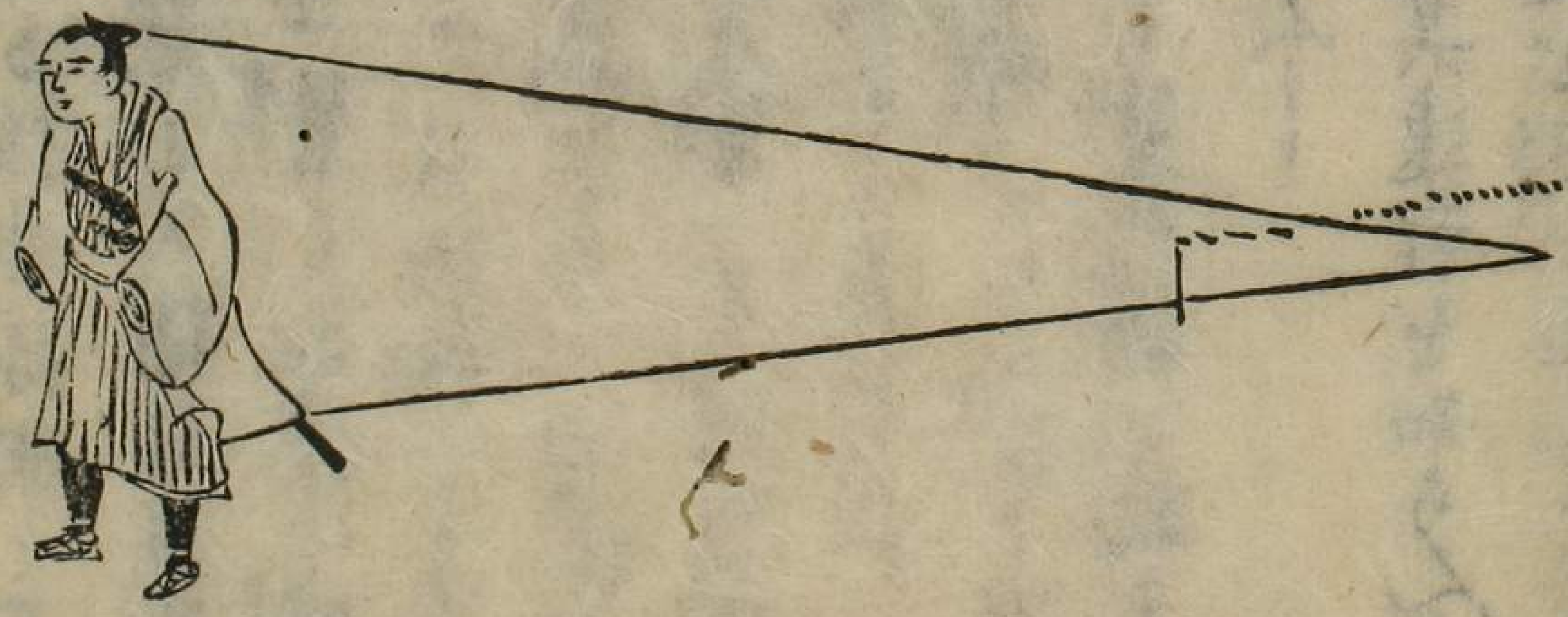


様体

此術ハ彼方に立たる人を種とし此方より其所までの遠さを知る術なり

術曰渾発を開き向に立たる人を夾み見て。譬ば其渾発の口二分あらば。八十三間二尺。三分なりとぞ五十五間三尺。四分なりとぞ四十一間四尺也。餘ハ是に准て知べし。右何れも鏁二尺を。人長五尺ハ乗じ。即渾発の顕る口を以て除き。叔又一間の法。六尺を以て除けば。遠程何程と知るなり

凡人長を五尺とするも太略なり。殊り急なる場にての業なれバ。用捨の格を用ひてさだむべし

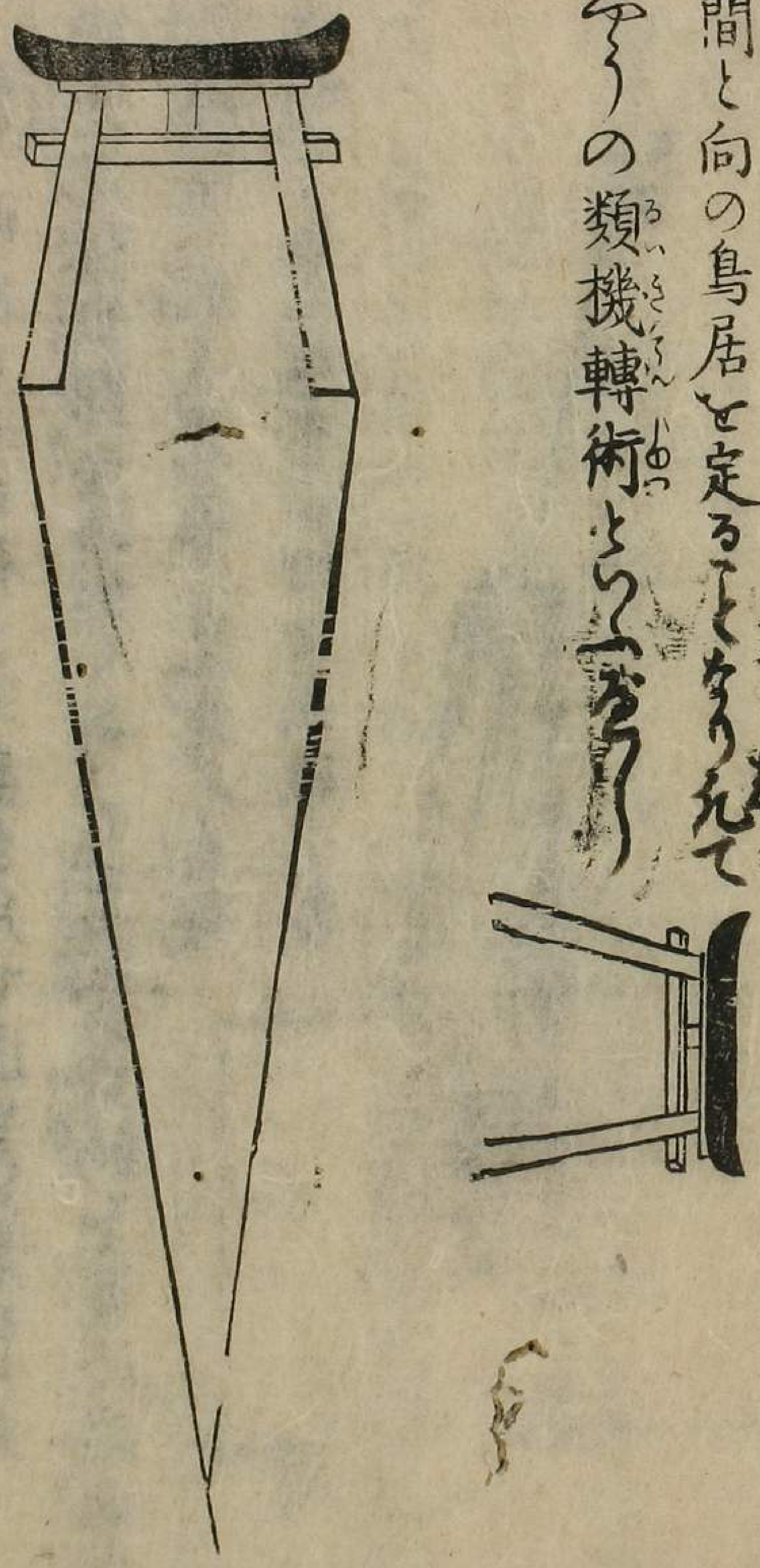


又旧傳に様程といふ名目あり。其術を考る様体様脚と異
事一般なり。根其名目を立たると見ゆ。既に又様体様脚
別術に非ず。是も一術となして然らんか。今暫く古傳に随
て此に是を述ぶ。昌弘曰。様体様脚といふハ目的種なすさの
地と。又ハ山陰土手陰。叢中との諸の術障まで多き所にて八
人の歩行の跬の数を以て種とし。一本ハ事業にて。其町間を
量り知るともいふべきか。好で試に用ゆべきことのハあらば

白浪

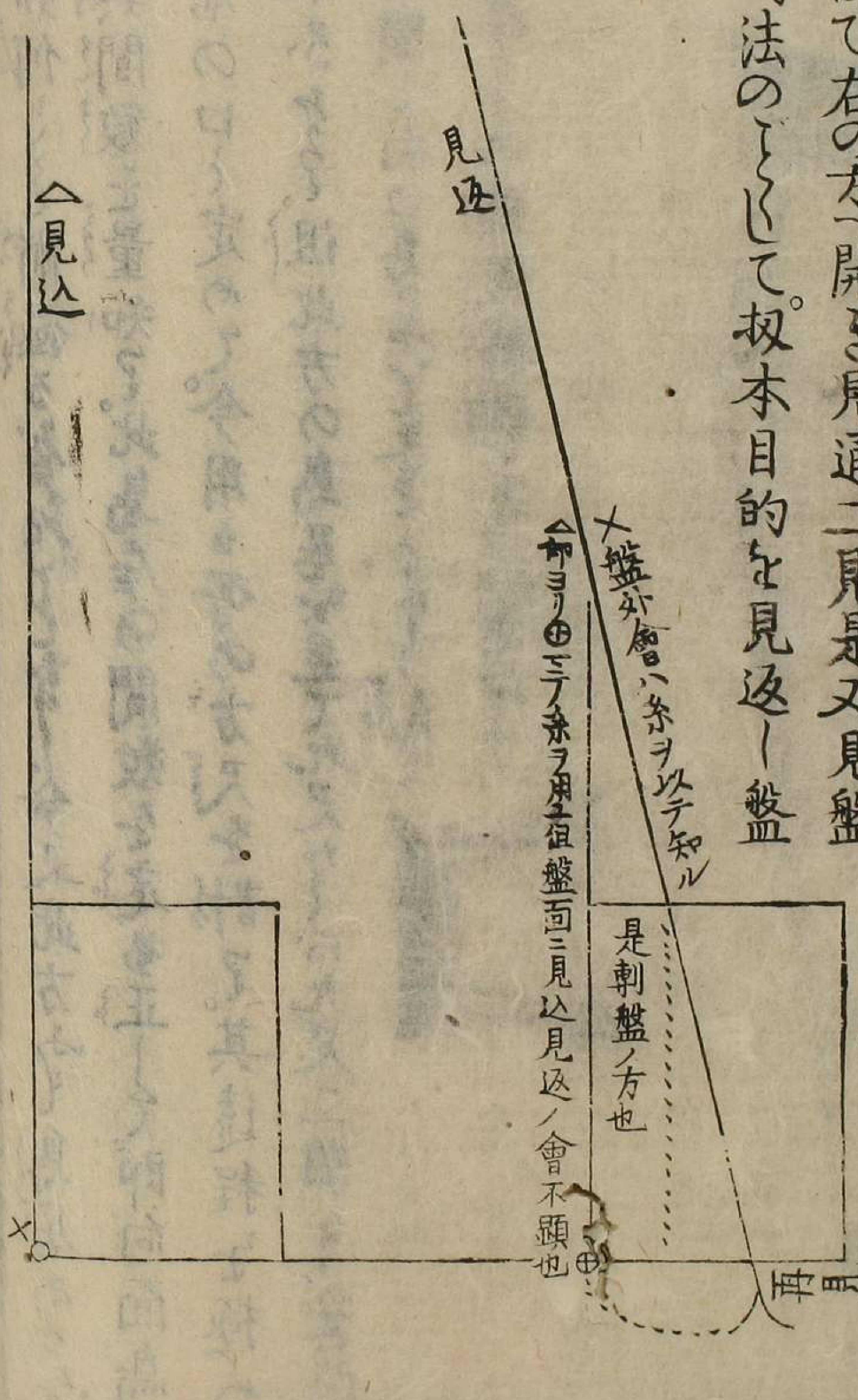
白浪術といふハ。旧傳になづけなる所ハいかなる故といふ
ことを知らず。昌弘考るに。覔先術と同じ。豈別條を設るに
及ばんや。是又好事の説なりと察すべし
術曰今圖するところの彼方の鳥居まで。其遠程を知らんと
欲するに。向の鳥居其間数を知れ。故に是を夾み見んとせば

如何ともし術極るなれどもなし。今又此方にも鳥居あるを
其間数を量知るに。此鳥居の間数を定め正して。即向面鳥
居の口と定めて。今用る所の方尺を計る。其遠程を極め
知るなるべし。但此方の鳥居を見て九尺ならバ九尺二間あらバ其間
二間と向の鳥居を定ることなり。凡て
かくの類機轉術といふべし



猥獲

此術も又旧傳云見盤を用て遠里を量ると云
術曰先見盤術作法の如くふして正面の目的を見込開地を設て右の方へ開き見通二見是又見盤術法のごとくして扨本目的を見返し盤

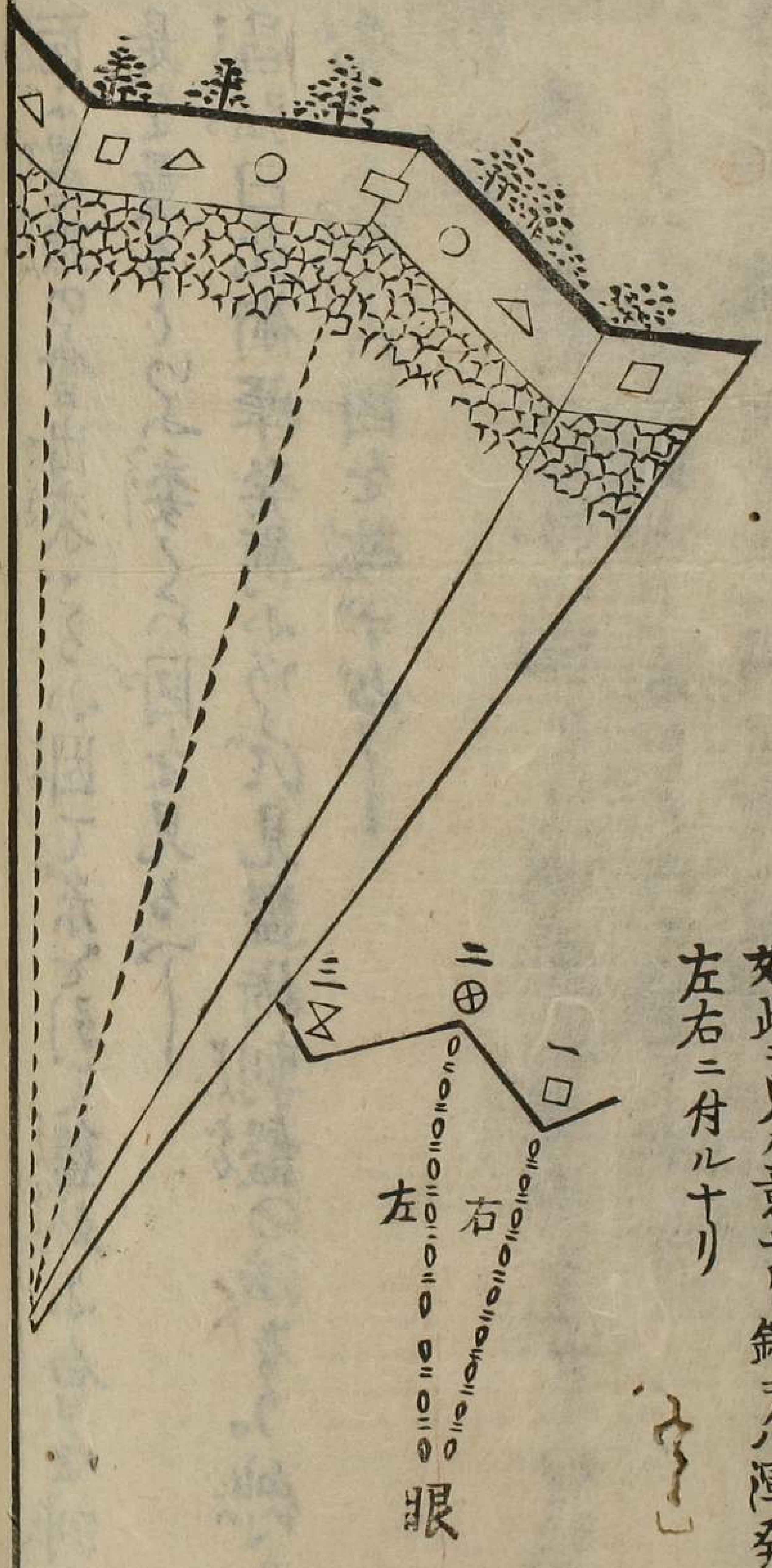


面よ墨線の會出來ざるに因て糸を引て盤外に會を制し是を量るといふ委くハ図を見るべし
昌弘曰此術渾発術にかゝはる見盤術剸盤の法なり。然乃嗚呼ら。詳ハ図を按ずべし

開扇

傳云此術ハ向面に種なれ時。遠程廣狹を量る時に外より一の種を取出し。是をもって量る術なり
今云所ハ豫め此方の一間を知る。扨（是より當術之）渾発をもって此一間を夾さ遠さ量る知る（遠程八間なり 取出す種なり）扨又二へうつるハ分間をて一の場の左の鏁を遠さ八間計りる鏁を右に付け。二の場を鉾よ見る。尤分間の口を殘し置。此分間の口ふて今見る二の場の左の鏁を計る。幾間幾尺と知る

扨またる三の場へうつりて。又三の目的を見るも。二の場の術と同意なり。場所何程ありとも。是まて御ふるべし。此術ハ鏢を渾発の左右に付るなり

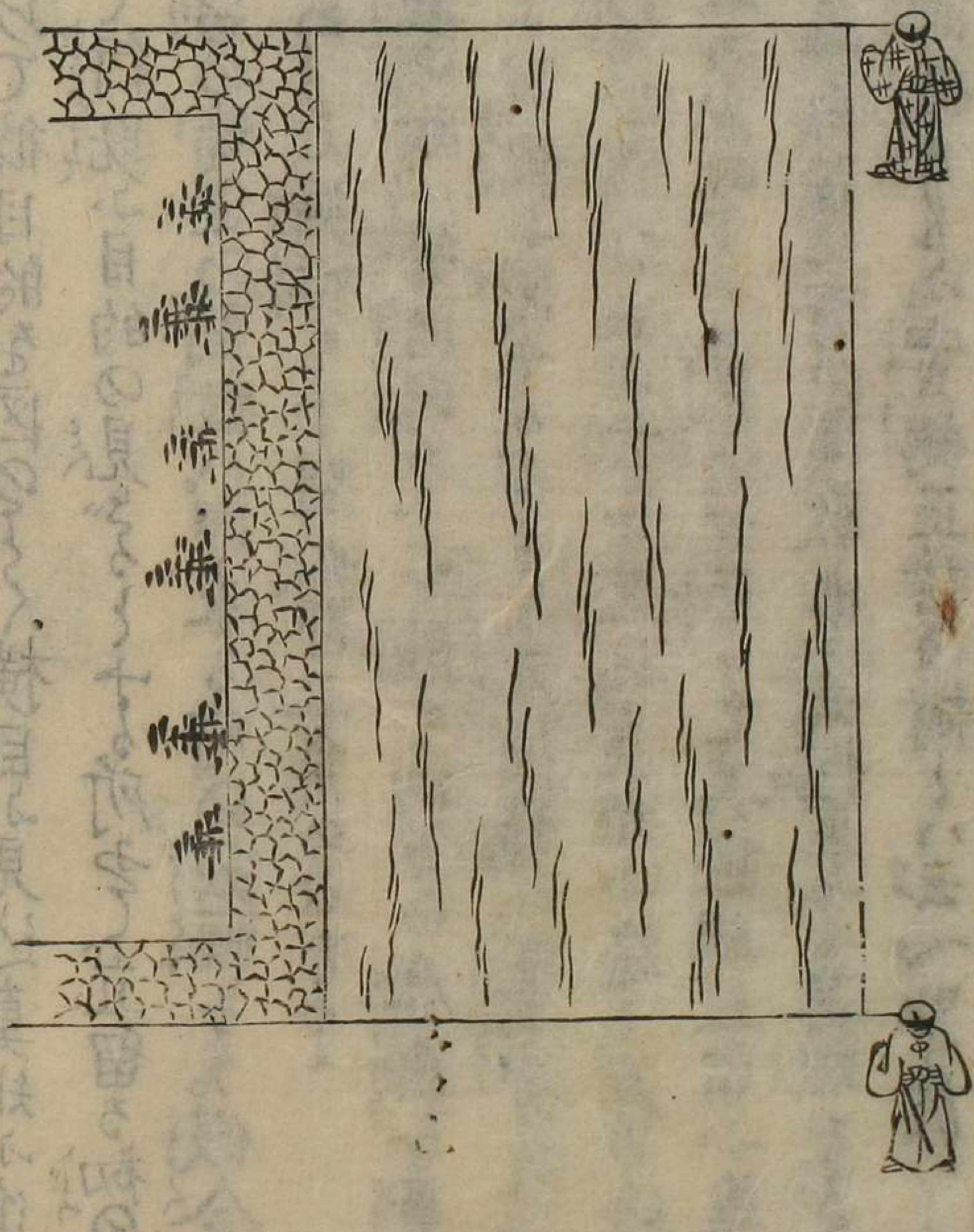


如此ニ見ル意ナリ鏢ナハ渾発ノ左右ニ付ルナリ

方鏡 古傳云是ハ堀幅川幅等を知るの術なり

術曰先堀端に臨ミ。向の屏にても石垣にても目志るし所を撰ひて目的とし。左眼を以て彼目的を図のごとく横目に見込。真矩に進ミながら。尻目に掛て行。既に目的の見ざるとする所にて。立留る初の見込の場より立留の場迄の間数ハ。即求る所の堀幅なり。假令ば進む間。十間あらば。堀幅も十間也。即二ノ角の心なるべし

一説に曰此方鏡の術ハ。堀沼河などを隔て向方の廣狭を量る術なり。其法に曰。後に図するがごとく。先堀端に正當り立て。左眼を以て望む所の左の方を見込。真矩に進ミ。左方の望の所にて。又右の方のごとく見込せ。而して其堀端正當に進る歩数の間。即堀向望の所の間数也と云。何れにても其理なるにあれど。然ども両様ともに實側正當の術とハ云べからず



量地指南後篇巻之五終

跋

享保の季年。量地指南前編三巻を選集して。世上に擴む。継て後編を述作せんこと。諸家子乃需止事なく。既に許諾の志ありといへども。公務餘力なく。心の外に黙止す。其後不圖病痾に罹て苦悩程久し。卒に痼疾となりて薬劑無験。起臥不遂。因て不得止致仕閑居すること茲に十有餘年なり。予成童の昔より。武学兵術に癖して

主用繁務の中といへども此道のミ一日も不棄し。其後病ニ沈ミて。講習を廃せんとす。既ニ右ニ云へるがごとし。況や其他の事藝。量地の小技をや。誠ニ其術忘るゝに似たり。然るニ此頃。奥州乃山岸定則。予ガ閑隱の扉を扣て。量地前編の余意を索ること頻なり。予再三病をと以て辭すれども。不肯強て請ニ不止。其深切他ニ超へ。其勉強人ニ勝まり。其爲人。此道ニ俊發なること。世ニ又類少し。依て不顧前後點首

志て。直ニ愚息昌言ニ命して。予ガ弱冠ニ閲見するところの。彼是の書五六部より内。前編ニ洩たる物を抜萃なさしめんて。山岸氏ニ授て暫く其責を塞く。元來此書予ガ全く編述ニあらざれバ。諸本の訓詁補ひて。抜萃なさしむる者なれバ。然も其的當ハ深理よりして。幸に人ニ賞せらるゝも予ガ譽ニハあらず。又猥雜の齟齬ありて。終ニ世ニ謗らるゝも。予ガ耻辱ままを招かん

覧者ねかはくは是をおもえ

寶暦四甲戌夏六月　村井蘊道子昌弘書

文化七年歳次庚午春穀旦求版

大阪書舗

高麗橋通　藤屋彌兵衛

心齋橋通　藤屋徳兵衛

高麗橋通　藤屋善七